

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
対人援助学特講	佐藤 直明	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

対人援助活動に従事する援助者自らが、自己の援助活動に関して活動内容を振り返り、活動初期判断状況や途中経過過程や具体的な成果や課題について、客観的に説明や報告や発表ができる。その中で、対人援助者としての自己覚知を図り、ソーシャルワーカーの役割を考察し、対人援助者としての資質の向上を図る。

概要

対人援助に関して、具体的な援助現場における、実際の活動を通して、広範な対人援助活動の概念や意義を整理立て、対人援助者としてのソーシャルワーカーの役割のあり方を分析・検討し、考察を深める。具体的な実践領域の調査も含め、事例研究や意見発表、ロールプレイ等を含め、求められる福祉支援の意味を探究する。

授業の方法:板書・フィールドワーク・ロールプレイ・交流分析・事例研究・関連資料の配布、討論・視聴覚教示あとの活用等。

キーワード

ソーシャルワーク、エコロジカルパースペクティブ、エンパワメント、スーパービジョン、アクティブ・ラーニング
実務経験のある教員による授業科目（認定社会福祉士認証認定機構登録スーパーバイザー、社会福祉施設療育指導員、児童福祉センター療育員等）、

授業の到達目標

対人援助活動に従事する援助者自らが、自己の援助活動に関して活動内容を振り返り、活動初期判断状況や途中経過過程や具体的な成果や課題について、客観的に説明や報告や発表ができる。その中で、対人援助者としての自己覚知を図り、ソーシャルワーカーの役割を考察し、対人援助者としての資質の向上を図る。

授業計画

- 第1回:対人援助活動の領域と概念(講義)
- 第2回:対人援助活動の意義と目的(講義)
- 第3回:対人援助活動の価値と倫理の考察(講義・演習)
- 第4回:対人援助活動の原理・原則と援助者の役割1(講義・演習)
- 第5回:対人援助活動の原理・原則と援助者の役割2(講義・演習)
- 第6回:対人援助活動とコミュニケーション1(演習)
- 第7回:対人援助活動とコミュニケーション2(演習)
- 第8回:対人援助のあり方考察と今後に向けての手がかりの整理(演習)
- 第9回:対人援助活動における自己覚知のあり方(演習)
- 第10回:対人援助における価値観と他者への理解(演習)
- 第11回:援助的コミュニケーションの意味(講義・演習)
- 第12回:援助における利用者への姿勢・態度のあり方(講義・演習)
- 第13回:対人援助活動の実践:事例研究Ⅰ(演習)
- 第14回:対人援助活動の実践:事例研究Ⅱ(演習)

第15回:総括(講義・演習)援助活動で求められる援助者の役割と機能考察

授業の予習・復習

授業の進行に応じて適宜指示を行なう

使用教材

- 1、「対人援助とコミュニケーション」主体的に学び、感性を磨く:諏訪茂樹(著):中央法規
- 1、「対人援助のためのコーチング」:諏訪茂樹(著)中央法規
- 1、ワークブック・社会福祉援助技術演習「対人援助の基礎」:山田容(著):ミネルヴァ書房
- 1、あなたを育てる「対人援助の本」:岡田誠(監修):KUMI出版
- 1、逐語で学ぶ「対人援助のための相談面接技術」:岩間伸之(著):中央法規
- 1、「対人援助実習サポートブック」:対人援助実践研究会(編):kumi出版
- 1、「ソーシャルワーク演習ワークブック」:相澤譲治他(編):ソーシャルワーク演習教材開発研究会(編):(株)みらい
- 1、「相談援助・保育相談支援」:笠師千恵・小橋明子(著):中山書店
- 1、「支援者が成長するための50の原則」あなたの心と力を築く物語:川村隆彦(著):中央法規
- 1、「人間関係とコミュニケーション」体験学習型ワークブック:手話秀樹(編集):建帛社
- 1、「価値と倫理を根底に置いたソーシャルワーク演習」:川村隆彦(著):中央法規

評価方法

評価方法

①出席 70%以上 ②レポートを提出し合格すること ③レポート不可の場合の対応なし

基準

- ①レポート課題の提出。対人援助者の援助姿勢と原則の確認、援助活動の現状と課題を踏まえた援助者の役割と機能の考察に関する理解、習熟度について審査する。
- ②レポート評価は100点満点で評価し、60点以上であること。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

特になし

前年度の授業評価

対人援助は、その活動そのものが、日々の様々な援助活動実践場面で行われている。授業は視聴覚教材等も使用しながら、演習形式で行われる事が多い。

その分、授業では、フィールドワークや事例研究を行いことが多い。相互交流等を通して、自己覚知を図り、広くて深い分析・検討を行う。そのため受講生が一定数多く居ないと、相互の意見交換交流が図られず、単なる感想の論述だけになってしまう事があった。

今後、出来るだけ実践に即した、問題解決に向けての取り組みに手がかりとなるような展開が図れる、考察を加えて行きたい。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
健康福祉学特講	松元 泰英	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

近年の子どもの障害の傾向や特性について理解し、それに対する指導法を学ぶ。

概要

周産期医療の現状と近年の子どもの障害の傾向を理解していく。また、子どもの障害の特性やそれに対する治療法及び療育や教育の在り方について学んでいく。

キーワード

周産期医療 脳性麻痺 筋疾患 神経疾患 てんかん アクティブ・ラーニング 実務経験のある教員による授業科目(特別支援学校教諭の経験を有する)

授業の到達目標

- 1 周産期医療と障害児の関係について理解する
- 2 脳性麻痺、発達障害 筋疾患、神経疾患などの障害について理解する
- 3 各障害に対する治療法を知る
- 4 各障害に対する療育や教育の現状を理解する

授業計画

- 第 1回 オリエンテーション
- 第 2回 周産期医療の現状について
- 第 3回 脳性麻痺の種類やその特徴について
- 第 4回 脳性麻痺の治療法について
- 第 5回 脳性麻痺の療育や教育について
- 第 6回 筋ジストロフィーについて
- 第 7回 脊髄性筋萎縮症について
- 第 8回 発達障害について
- 第 9回 発達障害の療育や教育について
- 第10回 発達障害児に対する指導法について
- 第11回 応用行動分析について
- 第11回 てんかんについて
- 第12回 てんかんの治療法について
- 第13回 重症心身障害児について
- 第14回 重症心身障害児の療育や教育について
- 第15回 障害児関連の論文研究

授業の予習・復習

周産期医療、脳性麻痺、発達障害に関わる記事等をインターネットなどを通して学習しておくこと。 毎時間、授

業で活用するワークシートに要点事項は朱色で記載しているので、予習復習を行うこと。

使用教材

DVD パソコン等

評価方法

最終回でのまとめのテスト(40%)、平常点(60%)

最終回にまとめのテストを行い、模範解答を例示します。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

遅刻・欠席は平常点に加味する。

授業での討議内容や態度を評価点に加える。

何か質問などがある場合には、メール(y-matsumoto@soc.iuk.ac.jp)にて、時間調節を行うこと。

前年度の授業評価

毎時間活用するワークシートでの評価であったが、今年度から最終回にまとめのテストを行う予定。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
高齢者福祉学特講	岩崎 房子	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513692

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

・高齢者をめぐる保健・医療・福祉の動向、地域包括ケアシステム等について学習する。

概要

レポート等に関しては、授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

高齢者の保健・医療・福祉、地域包括ケアシステム、アクティブ・ラーニング、「実務経験のある教員による授業科目(看護師の実務経験を有する)」

授業の到達目標

高齢者の心身の特徴および高齢者を取り巻く保健・医療・福祉の概要、地域包括ケアシステムにおける福祉施設の役割と福祉専門職の支援のあり方等について説明できる。

授業計画

- 第1回目 高齢者の生活の実態(講義)
- 第2回目 高齢者の心身の特徴(講義)
- 第3回目 高齢者をめぐる保健・医療・福祉の動向①(講義)
- 第4回目 高齢者をめぐる保健・医療・福祉の動向②(講義)
- 第5回目 介護予防(フレイル予防、施策)(講義)
- 第6回目 認知症高齢者および家族への支援(講義・演習)
- 第7回目 認知症高齢者および家族への支援(講義・演習)
- 第8回目 在宅介護の現状と課題①(講義・演習)
- 第9回目 在宅介護の現状と課題②(講義・演習)
- 第10回目 地域包括ケアシステムの概要(講義)
- 第11回目 地域包括ケアシステム実践事例の検討(講義・演習)
- 第12回目 介護および高齢者福祉施設の地域化(講義・演習)
- 第13回目 高齢者の生きがい・居場所づくり(講義・演習)
- 第14回目 高齢者の社会参加(講義・演習)
- 第15回目 福祉専門職による高齢者支援のあり方(講義・演習)

※レポート課題等に対しては、授業時またはEメールによりフィードバックを行う予定です。

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前:次回のテーマに関する資料収集・読解等、授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

授業開始時等に提示する。

評価方法

成績評価方法

①7割以上出席した者を成績評価の対象とする。

②レポートを提出し合格すること

成績評価基準

①レポート課題の提出 100%。

②レポート評価は100点満点で評価し、60点以上であること。

③授業への参加状況も加味することがある。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

・授業計画等に変更する場合がある。

・オフィスアワー等については授業開始時などに指示する。Eメールアドレス:fiwasaki@soc.iuk.ac.jp

・レポートや課題等に関しては、授業時またはEメールでフィードバックを行う。

前年度の授業評価

開講初年度のため実績なし

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
障害者福祉学特講	肥後 祥治	前期	2

ナンバリングコード

M_WEL513692

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

障害者福祉学において一般的に扱われるのは、その制度論や社会学的観点からの論考であった。本講では、その立場を少し離れて、障害者の支援方法論に焦点をあてていく。

概要

障害者の支援の方法は、障害種、年齢、対象(当事者か家族か)、課題などにより非常に多岐にわたるが、学習理論を背景にもつ行動分析は、非常に汎用性の高い方法論である。本講においては、この行動分析の基礎を理解し、障害者支援の領域にいかに関用可能かについてケーススタディー等を通して検討していく。

キーワード

障害者支援方法論、障害者観、行動分析学、認知・行動療法、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

本稿では以下の到達目標を設定している。

- ・学習理論に基づく障害者支援方法論(行動分析学)の基礎概念について説明することができる。
- ・行動障害への行動分析学の適用についてその有効性を説明できる。
- ・知的障害／発達障害者への行動分析学の適用の有効性を例示しながら説明できる。
- ・ウォルフエンズ・ヴェルガーの障害者観と障害者処遇の概念を理解し、障害者支援の方法論との関係について説明できる。

授業計画

1. オリエンテーション／行動分析学の基礎1
2. 行動分析学の基礎2
3. 行動分析学の基礎3
4. 障害者のコミュニケーション行動の支援1
5. 障害者のコミュニケーション行動の支援2
6. 障害者のコミュニケーション行動の支援3(ケーススタディー)
7. 行動障害へのアプローチ1
8. 行動障害へのアプローチ2
9. 行動障害へのアプローチ3(ケーススタディー)
10. 実践的な保護者支援1
11. 実践的な保護者支援2
12. 実践的な保護者支援3(ケーススタディー)
13. 障害者観と障害者処遇1
14. 障害者観と障害者処遇2
15. 講義の総括討議

授業の予習・復習

使用するテキストや配布資料に関する口頭発表の準備とそのレジュメ作成。新規の学修内容の復習。

使用教材

子どもの行動上の問題への挑戦. 肥後祥治, 2010, 明治図書.

評価方法

講義中の口頭発表の際作成したレジュメ(40%)、討議における参加の積極性(20%)、最後に提出される総括レポート(40%)をもとに評価を行います。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

講義に際してテキストで扱う部分や資料は事前に提示しますので、必ず目を通して参加のこと。また担当になった部分においては、簡単でも良いので口頭発表用のレジュメを用意してください。遅刻、欠席、中途退出への対応は、大学の基準に準拠します。質問等に対しては、授業中、授業終了後に対応することを念頭においていますが、必要である場合や確認事項等ある場合は、以下のe-mail アドレスにメールをお願いします。
higosho@edu.kagoshima-u.ac.jp

前年度の授業評価

なし

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
児童福祉学特講	岩井 浩英	前期	2

ナンバリングコード

M_WEL513694

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

子ども家庭の福祉とソーシャルワーク実践について

概要

本科目では、まず、子ども家庭福祉の基本について再確認する。次に、領域各論として、実施体制や施策・サービス内容等についての理解を深める。そのうえで、問題特論として、ウェルビーイング追求の視点から、子ども家庭支援のソーシャルワーク実践について実践的に検討・考察することを目的とする。

※なお、問題特論では、毎年度、時宜に適った特色ある問題を設定する予定である(今年度は、スクールソーシャルワーク等)。

キーワード

子ども家庭福祉の基本、領域別の実施体制や施策・サービス内容等、子ども家庭支援のソーシャルワーク実践、アクティブラーニング、実務経験のある教員による授業科目

授業の到達目標

1. 子ども家庭福祉の基本について再確認する。
2. 領域各論として、実施体制や施策・サービス内容等についての理解を深める。
3. 子ども家庭支援のソーシャルワーク実践について実践的に検討・考察する。

授業計画

第1回 序／基礎論

- ・オリエンテーション
- ・「子ども家庭福祉」基礎a

第2回 基礎論

- ・「子ども家庭福祉」基礎b

第3回 基礎論

- ・課題学習①(「子ども家庭福祉」基礎関連)

第4回 領域各論

- ・保育・子育て(家庭)支援領域a

第5回 領域各論

- ・保育・子育て(家庭)支援領域b

第6回 領域各論

- ・課題学習②(保育・子育て(家庭)支援領域関連)

第7回 領域各論

- ・養護・自立支援領域a

第8回 領域各論

- ・養護・自立支援領域b

第9回 領域各論

- ・課題学習③(養護・自立支援領域関連)
- 第10回 領域各論
- ・障がい児(者)支援領域
- 第11回 領域各論
- ・課題学習④(障がい児(者)支援領域関連)
- 第12回 問題特論
- ・子ども家庭ソーシャルワークa
- 第13回 問題特論
- ・子ども家庭ソーシャルワークb
- 第14回 問題特論
- ・課題学習⑤(子ども家庭ソーシャルワーク関連)
- 第15回 総括・補足
- ・ソーシャルワーク専門職のあり方等
 - ・まとめ
- ※各回、〔岩井〕専門相談員実務経験に基づく。

授業の予習・復習

- 各自、授業前後に合計4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。
- 具体的な学修内容は、毎回授業時にそのつど指示する。

使用教材

参考書:

◎九州社会福祉研究会(編)『第2版 21世紀の現代社会福祉用語辞典』学文社

※その他、必要に応じて、そのつど参考書を紹介する。

特記:

- 教科書は使用せず、プリント資料を配付する。
- 「福祉小六法」(最新年度版)について、毎時間持参することが望ましい。

評価方法

期末レポート 60%
(随時)レポート等 20%
受講状況 20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- 演習形式を基本とし、課題学習を随時導入する。
 - 随時課すレポート等課題に対するフィードバックは授業中に行う。
 - 上記「評価方法」における「受講状況」とは、受講の意欲・態度や取り組み等を踏まえるものである。
 - 授業時間外の対応については、初回授業時に指示する。
- ※メールアドレス:iwai@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

○本科目の趣旨等はほぼ定まったが、今年度も、引き続き、問題特論として、応用・実地的な話題提供や議論を重ねていく。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
保育学特講	前原 寛	前期	2

ナンバリングコード

M_WEL513761

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

現代社会における保育の探究

概要

・授業の目的

保育は、こどもと保育者がともに生活する営みであり、そのために求められる専門性がある。また、その場は、内部に閉じてしまうものではなく、社会の中に位置づけられなければならない。本授業においては、保育者の専門性及び保育と社会との関係について学ぶことを目的とする。その柱は、日常性、発達理解、子育て支援、同僚性であり、それらを順次取り上げていく。

・授業全体の流れ

授業全体の流れとしては、課題を受けての課題発表を中心とし、受講生同士のディスカッションを中心に行う。

・授業の方法

文献読解及び情報探索に基づく課題発表及びディスカッションを通して理解を深めていく。また、適宜レポートの作成を行い、その点検等を通して論理的思考力を高めていく。

・課題に対するフィードバック方法

文献読解及び情報探索に基づく課題発表について評価を行う。また、レポート等の提出を課し、評価して返却する。

・授業の方法の例

授業は板書・プレゼンテーションを中心とする。適宜、保育に関する事例検討なども行う。

キーワード

保育、保育者、こども、専門性、アクティブ・ラーニング、実務経験のある教員による授業科目（保育園園長としての実務経験を有する）

授業の到達目標

保育における保育者の専門性について理解できる。

現代社会における保育の位置づけと役割について理解し、課題解決を探究することができる。

授業計画

第1回 オリエンテーション及び保育概念について

第2回 園生活を考える

第3回 日常性について

第4回 こどもの居場所

第5回 存在感について

第6回 発達を捉える視点

第7回 育ちのステージ

第8回 保育実践の臨床性

第9回 保育カンファレンス

- 第10回 保護者支援の必要性
- 第11回 子育て支援の展開
- 第12回 保育者相互の支援
- 第13回 保育者の専門性
- 第14回 保育者の倫理綱領
- 第15回 本科目で学んできたことの振り返り

授業の中でテーマにそったプレゼンテーションを院生が行う。それに基づくディスカッションを行うとともに、より効果的なプレゼンテーションのための指導を行う。またレポートの提出に対しては内容の検討及び添削を行う。

授業の予習・復習

授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。具体的には、授業に際しては、文献を精読し十分に理解を深めてから臨むこと。また必要な情報の探索も自身で行うこと。

使用教材

テキスト『こどもの傍らに在ることの意味』大場幸夫、2007年
このテキストを中心に授業を進める。なお、参考文献等は授業中に適宜紹介する。

評価方法

平常点(10%)、ディスカッション内容(20%)、課題発表(30%)、レポート(40%)などによって評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

履修の前提として、保育制度や保育問題について基礎的な事前学習をしておくこと。
質問・意見等については、授業の前後に対応する。時間外の場合はメールで対応する。
メールアドレス zengen@mua.biglobe.ne.jp

前年度の授業評価

受講生が2人であったため、受講生に合わせた展開ができ、十分効果的に授業を実施できた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
保育方法学特講	坪井 敏純	集中	2

ナンバリングコード

M_WEL513761

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

環境を通して行う保育と遊びによる指導に基づく、保育方法や指導法のあり方を学ぶ。

概要

授業の目的;保育方法の基本は環境を通して行う保育と遊びによる指導であり、養護と一体化することで保育が成り立つ。この理論的考察と同時に現場の実践を通して保育の方法について学ぶ。特に子どもの育ちを生活という視点でとらえ、子ども自身の力で学ぶ保育の在り方という視点を身につける。そのためにもこの授業で幼児理解を深めていく。

授業の流れ;保育における保育所保育指針や幼稚園教育要領などにおける環境と遊びのとらえ方を確認し、養護と教育が一体化した保育に基づいて、幼児理解を深めながら、心理学的側面から保育方法や指導法を考察する。さらにいくつかの保育形態について、その違いと目的を知り、具体的な指導案や保育実践例から指導法を学ぶ。また保育のもう一つの柱である子育て支援について、意義目的を理解し、特に保護者とのコミュニケーションの取り方を学ぶ。

授業の方法;基本的にアクティブラーニングに基づく授業形態をとる。適宜、与えられたテーマについてレポートあるいは口頭により発表し、また実践例を持ち寄り、解説し、ディスカッションによって理解を深め、課題解決を図る。また随時ロールプレイを取り入れる予定である。なお、受講生が持つ課題についても、できるだけ取り上げて、解決に向けて議論する。

課題に対するフィードバック;発表やレポートなどは事前事後に口頭もしくは添削等によりフィードバックを行う。

キーワード

保育方法、遊び、環境、動機づけ、子育て支援、アクティブラーニング

授業の到達目標

保育における、環境を通して行う保育と遊びの意義について理解し、幼児理解を深め、具体的な保育を行う保育方法の実践力を身に着けることができる。

保育実践における問題について気づくことができ、課題解決を図ることができる。

子育て支援における保育者の適切な援助を行うことができる。

授業計画

第1回 オリエンテーション

第2回 幼児理解と保育

第3回 環境による保育

第4回 保育における遊び

第5回 遊びと内発的動機づけ

第6回 主体的に「学ぶ」ための動機づけ

第7回 主体性と保育におけるアクティブラーニング

- 第8回 保育形態(設定保育と自由保育)と保育者の援助
- 第9回 保育形態(異年齢保育と年齢別保育)と保育者の援助
- 第10回 異年齢保育の実践の検討
- 第11回 異年齢保育から見た保育指導・援助の在り方
- 第12回 保護者とのコミュニケーション
- 第13回 子育て支援の意義と方法
- 第14回 子育て支援施設の在り方と職員の役割
- 第15回 学びの振り返りと討議

授業の予習・復習

予習としては、事前に受講生が設定したテーマ、あるいは与えられたテーマについて、授業に必要な文献や資料の収集と精読により、各回のテーマについて討議できる準備をすること(プレゼンテーションを含む)。復習についてはレポート等の作成により、学んだことや新たな課題をまとめること。なおプレゼンテーションやレポート等の課題の指導については、口頭や添削などのフィードバックを行う。

使用教材

テキスト

「保育所保育指針解説(平成30年、厚生労働省編) フレーベル館発行

「幼稚園教育要領解説(平成30年、文部科学省(著))フレーベル館発行

「幼保連携型認定こども園教育保育要領解説(平成30年、内閣府・文部科学省・厚生労働省(著))フレーベル館発行

なお参考図書、文献、あるいは授業に関連する資料は、適宜こちらで紹介または準備する。

評価方法

授業への参加態度(30%)、プレゼンテーションの内容(30%)及びレポートの提出(40%)。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

保育について基本的な学習をしていることが望ましいが、初学者でも履修は可能。

オフィス・アワー(授業時間外での質問等)については、授業の前後を利用する。時間外についてはメール、あるいは電話で対応する。

前年度の授業評価

受講生との討議が十分に実施でき、テーマを深めることができた。配布資料が多く、活用が十分ではなかったと思われるので、今年は整理して利用できるようにしたい。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
精神保健福祉学特講	茶屋道 拓哉	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513692

使用言語

日本語で行う授業

テーマ

精神保健福祉施策の歴史的展開とメンタルヘルスソーシャルワーク

概要

現代社会における精神保健上の諸課題について、我が国の精神保健福祉施策における歴史的・文化的・社会的背景を踏まえたうえで、「メンタルヘルスソーシャルワーク」の視点から再接近する。ソーシャルワーカーという精神保健福祉領域において特徴的立場に立つ専門職の固有性とその限界について、他職種チーム医療、あるいは超職種チーム、地域包括支援、倫理的ディレンマ等の観点から検討する。毎回の講義テーマに即して提示する課題とそれを活用した講義中のディスカッションを重視する。

キーワード

メンタルヘルスソーシャルワーク、精神保健福祉施策、倫理的ディレンマ、アクティブ・ラーニング、実務経験のある教員による授業科目（社会福祉士・精神保健福祉士としてのソーシャルワーク実践）

授業の到達目標

- ①精神保健福祉施策の歴史的展開を学び、わが国の現状や課題を論じることができる。
- ②「メンタルヘルスソーシャルワークとは何か？」について院生自身の言葉で説明することができる。

授業計画

- 第1回 精神障害者の置かれてきた立場性①(偏見・差別)
- 第2回 精神障害者の置かれてきた立場性②社会防衛・逸脱・社会的排除
- 第3回 精神医療保健福祉と権力(援助関係性・自己決定論も含めて)
- 第4回 精神保健福祉施策の変遷①(史的展開)
- 第5回 精神保健福祉施策の変遷②(精神科病院をめぐる事件と権利)
- 第6回 近年の精神保健福祉の現状と課題①(退院促進・地域移行・地域定着・アウトリーチ・地域包括支援)
- 第7回 近年の精神保健福祉の現状と課題②(ナラティブ・当事者研究・ストレングスモデル・ダイアログ)
- 第8回 メンタルヘルスソーシャルワークの射程
- 第9回 メンタルヘルスソーシャルワーク実践における諸課題①ソーシャルワーカーの固有性と限界
- 第10回 メンタルヘルスソーシャルワーク実践における諸課題②他職種チーム医療と超職種チーム
- 第11回 メンタルヘルスソーシャルワーク実践における諸課題③専門職の倫理とディレンマ
- 第12回 メンタルヘルスソーシャルワーク実践における諸課題④理論と実践の往復(ITP Loop)
- 第13回 メンタルヘルスソーシャルワークを総合的・包括的に推進するための理論的背景と実践(含;ディスカッション)①
- 第14回 メンタルヘルスソーシャルワークを総合的・包括的に推進するための理論的背景と実践(含;ディスカッション)①
- 第15回 メンタルヘルスソーシャルワークを総合的・包括的に推進するための理論的背景と実践(含;ディスカッション)①

授業の予習・復習

毎回の講義内容に即した事前学習(問題意識の整理)を行ったうえで講義に臨んでください。

講義テーマに沿ったディスカッションを行います。
講義後に配布資料と講義内容をもとに振り返りを行ってください。

使用教材

テキストは指定しませんが、以下の資料等を基に学修を進める予定です。
フレデリック・G・リーマー著，秋山智久監訳『ソーシャルワークの価値と倫理』2001年，中央法規。
チャールズ・A・ラップほか著，田中英樹監訳『ストレングスモデル(第3版)』2014年，金剛出版。
田中英樹著『精神障害者支援の思想と戦略～QOLからHOLへ～』2018年，混合出版。
井手英策・柏木一恵ほか著『ソーシャルワーカー～「身近」を革命する人たち～』2019年，ちくま新書。
鶴幸一郎・藤田孝典ほか著『福祉は誰のために～ソーシャルワークの未来図～』2019，へるす出版新書。
荒井浩道著『ナラティブ・ソーシャルワーク“＜支援＞しない支援”の方法』2014，新泉社。
向谷地生良著『技法以前』2009，医学書院。
Marion Bongo & Elaine Vayda(2000),The Practice of Field Instruction in Social Work Theory and Process 2nd Edition ,University of Toronto Press.

評価方法

課題提出(30%)、ディスカッションの内容(20%)期末レポート(50%)で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは受講生と相談しながら決めていく。

前年度の授業評価

今年度より新規担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
臨床発達心理学特講	永富 大輔	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL511430

使用言語

日本語で行なう授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

臨床発達支援における基礎的な理論と支援について知る。さらに、様々な発達段階における支援の内容、求められる専門性、現状の問題点について知る。

概要

＜授業の目的＞

臨床発達支援における基礎的な理論と支援に到るまでのアセスメント・計画・評価方法、さらに、育児への支援から成人期以降における支援に関して、支援の現状、求められる専門性、支援の実践について学ぶことを目的とする。

＜授業全体の流れ＞

授業開始時、事前に指示した教科書の該当ページから事前テストを実施する。その後、講義を行う。講義はスライドを主に利用する。また、授業内容に関する討議の時間を設ける。講義終了時に、講義内容の定着を目的に、事後テストを実施する。事前テスト・事後テストの解答、解説は授業中に行う。

＜レポートの添削、返却＞

学内システムを用いて行う。

キーワード

臨床心理学、生涯発達支援、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

臨床発達支援における理論と対象者の実態把握・支援方法、実践を学び、説明することができる

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、障害における発達
- 第2回 生涯発達をとらえる基礎理論
- 第3回 臨床発達支援の基本的視点
- 第4回 アセスメントの原理
- 第5回 支援活動の展開
- 第6回 支援におけるコミュニケーション
- 第7回 臨床発達支援の基本的技法
- 第8回 臨床発達支援と研究
- 第9回 倫理
- 第10回 育児への支援
- 第11回 保育への支援
- 第12回 学童期における支援
- 第13回 前期青年期における支援
- 第14回 後期青年期における支援

第15回 成人期以降における支援

授業の予習・復習

予習として、授業中に教科書の読むページを指定します。必ず読んで授業に参加するようにしてください。予習の確認として、授業開始時に事前テストを実施します。

復習としては、教科書の該当ページ、授業中に提示した参考書、参考文献、興味のあるキーワードに関する論文や書籍を用いて行ってください。

予習・復習は合わせて4時間程度を行うようにしてください。

使用教材

山崎晃・藤崎春代 編著(2017)『臨床発達心理学の基礎』ミネルヴァ書房

西本絹子・藤崎眞知代 編著(2018)『臨床発達支援の専門性』ミネルヴァ書房

＜使用方法＞

授業内容は教科書の内容に沿って行います。教科書以外の参考書、参考文献については、授業中に提示します。教科書は必ず購入し、授業前に読むようにしてください。

評価方法

事前テスト・事後テスト 20%

授業中の態度・発表 20%

レポート 60%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

＜履修の前提となる知識、態度、技能＞

自身の専門性を常に高めるため、教科書以外に臨床発達心理学、発達、アセスメント、研究テーマ等に関して、書籍や論文に自ら積極的に触れるよう心がけてください。

＜欠席時の取扱い＞

やむを得ず授業に参加できないときは、代替課題を行っていただきます。メール等で連絡してください。

＜受講生の質問・意見に対応する方法＞

オフィスアワー、メールアドレスは授業の初回時に提示します。

前年度の授業評価

今年度より担当

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
生涯教育学特講	千々岩 弘一	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513790

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

授業のテーマ

生涯にわたる人間の学び

概要

本講義では、福祉的視点と絡めながら、人間の成長に伴って展開される学習のあり方について考えていく。具体的には、以下のような骨格で講義していく。

1. 我が国の教育政策の概観
2. 発達段階に即した学びの動向に関する概観
3. 福祉的視点と学びのあり方に関する考察
4. 地域社会と教育をめぐる諸問題への追究

なお、本講義では、受講生の関心の中核に、相互の意見交換などを積極的に取り入れた活動型の展開を工夫する。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

福祉的視点と絡めながら、人間としての生涯にわたる学びのあり方について理解する。

授業計画

本講義は、概ね以下のような展開を考えている。

第1時 オリエンテーション（講義の目的・目標、内容、方法、評価についての説明）

第2時 我が国の教育政策の概観（1）教育関連法規

第3時 我が国の教育政策の概観（2）教育行政組織

第4時 生涯教育の諸相の概観

第5時 生涯教育に関わる諸問題（1）ー幼児・児童・生徒の発達段階と教育をめぐる諸問題ー

第6時 生涯教育に関わる諸問題（2）ー「言語」の機能と人間の発達ー

第7時 生涯教育に関わる諸問題（3）ー幼児期・学齢期における「読書」の意義ー

第8時 生涯教育に関わる諸問題（4）ー実年期における「読書」の意義ー

第9時 生涯教育に関わる諸問題（5）ー老年期における「読書」の意義ー

第10時 生涯教育に関わる諸問題（6）ー感性の育成ー

第11時 生涯教育に関わる諸問題（7）ーマナーとモラルを踏まえた徳育の在り方ー

第12時 生涯教育に関わる諸問題（8）ー本能的諸問題の取り扱いー

第13時 生涯教育に関わる諸問題（9）ー障がい者と学びー

第14時 生涯教育に関わる諸問題（10）ー高齢者と学びー

第15時 人間の発達と教育の有効性に関する総括的考察

授業の予習・復習

必要に応じて出された課題に関する文献を読んだり、自分なりの意見をまとめたりしておくこと。
なお、予習状況や復習状況は、講義の冒頭や展開の中で、質問などを通して確認していく。

使用教材

必要に応じてプリントを配布したり、参考文献を紹介したりする。

評価方法

受講態度及び必要に応じて課すレポートの質によって、総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

必要に応じて個別の対応も行う予定である。

前年度の授業評価

受講生にニーズに真摯に応えていきたい。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
職業教育学特講	吉留 久晴	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513752

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

職業教育の国際比較

概要

本授業では、(1)まず、世界の後期中等教育段階および高等教育段階における職業教育の現況を概観し、(2)その後、世界各国からたびたび関心が寄せられているドイツの職業教育に焦点をあて、同国の職業教育の実態を把握することとおして、日本の職業教育の特徴や課題を浮き彫りにする。なお、授業では、受講者に職業教育に関する諸文献(英語文献ないし日本語文献)の内容を分担報告してもらったうえで、必要な説明や補足、意見交換などを行う。

キーワード

職業教育、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 職業教育に関する重要な知識・知見を習得することができる。
2. 職業教育に関する現状や諸問題について把握することができる。
3. 職業教育のあり方について多角的に考察することができる。

授業計画

1. 職業教育論を学ぶ意義
2. 職業教育の概念
3. 職業教育の歴史
4. 職業教育の理念
5. 職業教育の国際比較
6. 職業教育の世界的潮流—後期中等教育段階—
7. 職業教育の世界的潮流—高等教育段階—
8. ドイツの職業教育制度の概要
9. 職業教育システムと労働・雇用システムの関連
10. ドイツの後期中等教育段階における職業教育
11. ドイツの高等教育段階における職業教育
12. ドイツの職業教育の行方
13. 日本の職業教育に対する示唆
14. 今後の職業教育(研究)の課題
15. 総括

授業の予習・復習

各授業後に授業内容について、合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。文献資料を配付する。

評価方法

文献の分担報告の内容(40%)とレポートの内容(60%)により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業外での質問等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
介護福祉学特講	田中 安平	前期	2

ナンバリングコード

M_WEL513690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

特定の対象者に対する理解を深め、円滑な支援が行えるように、受講生が各自体験してきた事例を演習課題として提案することで身につける。社会福祉も介護福祉も実践学であり、実践に役立つ理論を再構築する。

概要

特定の対象者を理解するための理論と支援する方法について、受講生各自が準備してきた事例(課題)等を発表することにより学習する。そのことで、認知症高齢者や家族介護者の心理や生活環境、介護の専門家である介護福祉士の介護の倫理・介護の哲学を理解できるようになる。

サービス利用者と援助者の関係は、障害児・者、高齢者と、発達段階や障害の形態によっても異なり、施設サービスや居宅サービスのように、サービスを受ける場所によっても異なることを理解できる授業形態とする。

介護福祉学は、介護という臨床の場に対応できる学問でなければならない。理論のための理論では意味をなさない。社会福祉士として適切なサービスを利用者に提示できるためには、適切な介護を理解する必要がある。これらのことを了解したところのアセスメントでなければ、ケアをマネジメントする段階で利用者主体のプランを作成することは困難になることを了解できる講義内容とする。

本講座は講座自体が課題に対するフィードバックとなっており、従来の一方通行的な講義とは異なるアクティブラーニングの形式を取り入れている。

課題に対するフィードバックは、講義のつど、もしくはメール等でいつでも対応可能である。

キーワード

対象者理解、利用者主体、地域包括支援センター、チームケア、アクティヴ・ラーニング 実務経験のある教員による授業科目（介護業務・相談業務・副施設長としての実務経験を有する）

授業の到達目標

受講生が各自作成した事例を講義の資料とすることで、事例作成の習熟につながり、適切な事例を作成することができるようになる。それぞれの受講生の事例を検討することで、自分が勤務している職種に特有な課題だけでなく、様々な社会問題や利用者に関する理解ができ、ソーシャルワーカーとしての幅広い技能を身につけることができる。社会福祉も介護福祉も実践学であり、実践に役立つ理論と実践方法を身につけることができる。

授業計画

第1回: 高齢者の疾病・障害の理解(講義)

第2回: 対象者への支援の展開1(受講生の事例1(高齢者等): 講義・演習)

第3回: 対象者への支援の実際1-1(受講生の事例2(認知症等): 講義・演習)

第4回: 対象者への支援の実際1-2(受講生の事例3(認知症等): 講義・演習)

第5回: 対象者への支援の展開2(受講生の事例4(障害・虐待等): 講義・演習)

第6回: 対象者への支援の実際2-1(受講生の事例5(障害・虐待等): 講義・演習)

第7回: 対象者への支援の実際2-2(受講生の事例6(障害・虐待等): 講義・演習)

第8回: 地域包括支援センターにおけるチームケアのあり方について(講義・演習)

第9回: 看護とケア: 介護の本質(介護のベクトルと看護のベクトルの差異について)

第10回:介護とケア:他者をケアすること。自己のケア

第11回:介護と介護福祉:概念整理

第12回:感情労働としてのケア:バーンアウトと共感疲労

第13回:生と死について:自然死にみる尊厳死

第14回:介護の哲学:臨床哲学としての介護

第15回:ケアカウンセリング:介護の専門性におけるケアカウンセリングとは。ソーシャルワークにおける相談援助技術とカウンセリング、ケアカウンセリングの差異。

授業の予習・復習

講義の資料として、受講生による事例が使用されます。講義前に、事例検討用の資料を作成する必要があります。資料作成を講義の予習とし、講義後の実践体験を復習として、次回の講義で発表してもらいます。実践学としての講義とします。

使用教材

特定の教材を使用することはない。受講生成成の事例を使用テキストとする。必要に応じて資料を準備し、資料を基に模範解答のない正解の有り様についてについて討論する。

評価方法

評価方法

①平常点 30% ②発表等授業参加 20% ③レポート(試験) 50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

講義で使用する事例を作成し、提出すること。

事例等は評価の対象とする。

授業に対する熱意等は減算で対応する(最大30%)。

講義等に関する質問等は、メールにて受け付ける。yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

今年度は受講生も9名(ケアマネ、障害者・高齢者関係施設長、MSW、教員、NPO法人職員等)であり、事例に対する意見も多彩で、有意義な講義ができた。福祉実践においては、その人の生き方を尊重するという点で様々な正解があるが、これが唯一の正解だとするところの模範解答はないという事を認識・体験できたと思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
社会保障論特講	田畑 洋一	前期	2

ナンバリングコード

M_WEL513640

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

講義(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会保障の政策原理に関する基礎的研究

- 1) 社会保障の基本的事項の整理
- 2) 各国の社会保障の基本原理の理解
- 3) 日・独・韓の介護保障の分析

概要

本講では、各国の社会保障制度を分析・検討し、安定維持的な制度への改革を展望する。そもそも社会保障は、対象者の普遍性、全生活生涯を網羅する包括性、保障の統一性を追及すべきであって、既存の制度の継ぎ接ぎであってはならない。この理念からすれば、社会保障の断片的で不整合な制度については、統合化・統一化に向けての再検討・再構築がなされなければならないと思う。ここでは社会保障の基本的事項をふまえ、受講者のテーマに沿いつつ、社会保障の政策原理に関する検討を行う。

キーワード

社会保障の原理・介護保障・要介護認定、課題設定

授業の到達目標

- 1) 社会保障の基本的事項の理解が深まる。
- 2) 各国の社会保障の基本原理と政策動向を把握できる。
- 3) 日独韓の介護保障の分析により、介護問題を展望できる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 問題の所在と研究課題
- 第3回 各自の研究計画の発表
- 第4回 社会保険と関連制度
- 第5回 ドイツ社会保障の原理
- 第6回 保険原理・援護原理・扶助原理
- 第7回 ドイツ介護保険法
- 第8回 要介護認定の日独比較
- 第9回 要介護認定の日韓比較
- 第10回 要介護度と給付の日独比較
- 第11回 要介護度と給付の日独韓比較
- 第12回 生活保護と介護保険の日独比較
- 第13回 生活保護と介護保険の日独比較
- 第14回 介護と仕事
- 第15回 社会保障の実践課題

授業の予習・復習

- ◇授業前後に必ず4時間程度の予習・復習をすること。
- ◇第1回授業時には各自の研究計画書を提出すること。
- ◇生活の中の社会保障を具体的に考え報告できるようにすること。

使用教材

- (1)Deutscher Caritasverband(Hg)(2017)SGBVI-Soziale Pflegeversicherung nach dem PSGⅢ inkl.“Hile zur Pflege“(SGBⅦ,7.Kapitel).
 - (2)Gohde,J.(2013)Reformbedarf der Pflegeversicherung,G+S.
 - (3)田畑洋一(2017)「ドイツ介護保険―要介護の「新概念」の導入と保険給付」『週刊社会保障』No.2918,48-53.
 - (4)田畑洋一(2014)『現代ドイツ公的扶助序論』学文社.
 - (5)田畑洋一他編著(2016)『社会保障―生活を支える仕組み』学文社.
- ◇資料は開講時に配布する。

評価方法

報告内容・提出レポート60点、研究姿勢40点

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ①出身学部が福祉系学部でなかった等の理由で、社会福祉概論・社会保障論等の社会福祉基礎科目を履修していない者は、本学学部でそれらの科目を聴講するようにして欲しい。
 - ②オフィス・アワーについて開講時に指示する。
- ◇連絡先メール:ytataba@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

社会保障の政策課題については理解が深まった。シラバスどりの授業進行にはならなかったが、各自の研究テーマについての問題意識や研究発表の仕方や投稿論文のまとめ方・書き方については理解が深まったと思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
社会福祉法制特講	田畑 洋一	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513691

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

講義(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

介護保険法ードイツと日本の比較研究

- 1)介護保険の基本原則
- 2)要介護認定と給付

概要

本講では、社会福祉を巡る法的課題について、ドイツの介護保険法と日本の介護保険法を比較検討する。ここでは制度のあり様に係る包括性・普遍性と、制度化の背景にある選択可能性・科学性・効率性との関係のあり方を基本的視角として設定する。具体的には、①どのような脈絡で論点が設定され、②どのように説明されることによって具体的な結論が得られたかについて、③制度創設時以降の経緯を踏まえて検討し、④介護保険制度の基本的課題を探究するという方法を採用。なお、受講者の問題関心により内容を一部変更する場合があります。

キーワード

介護保険の基本的枠組み、要介護認定、保険給付、介護従事者

授業の到達目標

- 1)ドイツ介護保険の基本的枠組みが理解できる
- 2)日独の要介護認定の考え方の差異と要介護度と給付についての理解が深まる。
- 3)日独の介護従事者に関する知識が深まる。

授業計画

- 第1回受講者の問題意識の確認(構想発表:その他欄参照)
- 第2回社会福祉法制の体系と構造
- 第3回社会福祉の権利・義務関係
- 第4回高齢期のニーズと介護保険
- 第5回ドイツ社会保障の原理
- 第6回ドイツ介護保険の基本原則
- 第7回ドイツ介護保険の要介護概念
- 第8回ドイツ介護保険の要介護と給付
- 第9回日本介護保険の仕組み
- 第10回日本介護保険の要介護認定
- 第11回日本介護保険の給付
- 第12回日本介護保険の基本的課題
- 第13回日本とドイツの介護保険の類似点と相違点
- 第14回日本とドイツの介護従事者の状況
- 第15回講義全体に関する自由討論

授業の予習・復習

- ◇授業前後に必ず4時間程度の予習・復習をすること
- ◇第1回授業に研究計画書を提出すること
- ◇介護問題について日常的に考え報告できるようにしておくこと

使用教材

Deutscher Caritasverband(Hg)(2017)SGBVI-Soziale Pflegeversicherung nach dem PSGⅢ inkl.“Hile zur Pflege“(SGBⅦ,7.Kapitel).

Nerlich,J.(2007)Die Pflegeversicherung:Entstehung-Pflegestufen-Versorgungsformen,Grin.

社会保障法学会編(2012)『地域生活を支える社会福祉』法律文化社.

田畑洋一(2017)「ドイツ介護保険―要介護の「新概念」の導入と保険給付」『週刊社会保障』No.2918,48-53.

田畑洋一(2014)「ドイツの介護保険と介護改革の残された課題」『週刊社会保障』No.2802, 50-55.

.

評価方法

報告内容・レポート60点、研究姿勢40点

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ◇第1回授業時に資料を配布するので毎回それを持参すること。
- ◇適宜、各自の研究テーマに沿った授業を行ったり、受講者の都合により授業時間を変更したりすることもある。
- ◇連絡先メール:ytabata@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

問題意識が高まり、研究の仕方・方法が深まる。他の担当科目と同様、シラバスを基本としながら、各自の関心事についても指導する。とくに論文の書き方・まとめ方が身につくよう指導する。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
社会福祉政策特講	鬼崎 信好	集中	2

ナンバリングコード

M_WEL513691

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

◆高齢者ケアシステムの在り方を考える

概要

20世紀は多くの先進工業国にとって、経済の高度成長の時代であり、成長の論理で社会システムの構築を考えれば良かった。社会福祉の分野でいえば、国民の一人ひとりに高度経済成長による富・果実をどのように分配するのか、社会保障・社会福祉の分野にどのように予算化するかが大きな政策課題のひとつになっていた。

しかし、1990年代以降、わが国においては急激な人口の少子化・高齢化が進行し、21世紀における社会システムの構築が喫緊の課題となった。高齢者保健福祉の分野では、「2015年問題」「2025年問題」という言葉に象徴される課題が浮上してきている。2025年問題についていえば、地域包括ケアシステムの具体化が大きな政策課題となっている。すなわち、地域社会レベル(市町村)で、医療・介護・予防・住まい・生活支援が一体的に提供されることが求められるようになっている。

そこで、本講義では社会福祉政策をマクロレベル、ミクロレベルから論点を整理していくことにする。

キーワード

福祉国家、福祉社会、高齢者ケアシステム、高齢者保健福祉制度、介護保険制度、包括ケアシステム、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ◆ 社会福祉学理論と実践の枠組みを理解する。
- ◆ 社会福祉政策・制度の変遷を理解する。
- ◆ 海外(主として北欧の国々、イギリス、アメリカ)の社会福祉制度を理解する。

授業計画

- 第1回 社会福祉学の理論(その1)
- 第2回 社会福祉学の理論(その2)
- 第3回 社会福祉の選別主義と普遍主義
- 第4回 社会福祉の理念、現実認識の構造
- 第5回 社会福祉政策の視角
- 第6回 わが国の社会福祉政策(その1)
- 第7回 わが国の社会福祉政策(その2)
- 第8回 社会福祉の財源、調達方法
- 第9回 海外の社会福祉(デンマーク)
- 第10回 海外の社会福祉(デンマーク)
- 第11回 海外の社会福祉(スウェーデン)
- 第12回 海外の社会福祉(フィンランド)
- 第13回 海外の社会福祉(イギリス)
- 第14回 海外の社会福祉(アメリカ)

第15回 総括

授業の予習・復習

指定する資料を精読して、必ず質問を3つ記してくること

使用教材

講義の際に配布する資料

世界の社会福祉年鑑(最新版)旬報社

鬼崎信好ほか編『世界の介護事情』中央法規出版、2002

『厚生労働白書』各年版

『世界の労働福祉白書』各年版

厚生労働省の関係資料(介護保険担当課長会議資料等)

その他は講義の際に指示する。

評価方法

レポートにより評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

教員の一方的な講義に陥らないように、振り返りシートを用意し、質問等の記入を求める。

前年度の授業評価

昨年度は開講していない。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
地域福祉学特講	高橋 信行	前期	2

ナンバリングコード

M_WEL513697

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

地域における福祉計画の策定や住民活動、ボランティア活動の方法を学ぶ

概要

研修目標

- ①鹿児島県内自治体における機関間連携の仕組み、インフォーマル活動を含む社会資源の実態、福祉政策の形成過程、福祉計画等について把握させるとともに、地域における自組織の役割の理解、地域の様々な地域の生活課題や福祉ニーズを発見させる。
- ②住民活動・ボランティア・NPOの支援の方法を学ばせる。
課題レポートについては、提出後コメント等を行う。

キーワード

アクティブ・ラーニング、アクションリサーチ、コミュニティワーク

授業の到達目標

到達目標

- ①鹿児島県内の地域の福祉システムを把握している。地域の生活課題、福祉ニーズを踏まえて、地域における自組織の役割について説明できる。地域の課題やニーズ、社会資源についてアセスメントできる。アセスメントに基づいて、地域介入の目標と方法を選ぶことができる。
- ②地域における住民活動やボランティアの受け入れ、コーディネート等のボランティア・NPO支援の方法を学び、地域福祉活動を推進できる。

授業計画

第1回 福祉計画と地域社会 講義

福祉計画の特徴と種類、また全国と鹿児島県における策定の実態について学ぶ。行政計画か否か、総合計画か個別計画か、根拠法があるか、市町村主体か否か、義務計画か否かなどを基準に、福祉計画の特徴をみる。また地域福祉計画策定率の低い鹿児島県の問題点などを議論する。

第2回 福祉計画の制度的背景 講義

老人保健福祉計画にはじまる行政計画の背景にある法的規定、民間計画も含めた背景について説明する。

第3回 福祉計画の実際と策定プロセス 講義

地域福祉計画や障害福祉計画の策定事例を使いながら、そのプロセスについて説明する。

第4回 実態（ニーズ）把握の方法Ⅰ（質的調査法）演習

質的データ処理の方法、インタビュー調査のまとめかた等について、事例を交えて演習する。十島村や南大隅町のデータを使用する。

第5回 実態（ニーズ）把握の方法Ⅱ（量的調査法）演習

調査票の作成、集計方法、分析方法について、実際の調査票を題材にしながら学ぶ。十島村や南大隅町のデータを使用する。

第6回 調査結果を施策に活かす 演習

十島村等の調査結果の分析を通して、事業の開発、福祉計画の策定について学ぶ。

第7回 住民福祉活動 講義

特にふれあいサロンや小地域ネットワーク活動、NPOの自主的活動ーホームレス支援活動などに焦点をおいて講義する。

第8回 前半 ボランティア活動の実態把握(講義)

県内ボランティア活動の数的実態と活動を事例を含め学ぶ。

第8回後半 住民活動支援(講義)

住民の主體的な地域活動、奉仕活動について、その支援方法を行政や社会福祉協議会の立場から説明する。

第9回 ボランティアマネジメントと実際(講義)

ボランティア活動のマネジメントの仕方を事例を交えて学ぶ。

第10回 ボランティアコーディネートの実際(講義)

ニーズ資源調整の視点から「奄美災害」等を事例に使いながら、災害支援についてボランティアコーディネートの方法や課題等について学ぶ。

第11回 地域プログラム開発の実際(演習)

鹿児島で最も高齢化の進む、南大隅町を例にとりながら、課題の発見から新しい事業開発を、特定ケースの実例を使いながら演習を通して学ぶ。

第12回 小地域活動と見守り・声かけ (講義)

小地域活動として、高齢者等の見守り、声かけのネットワーク活動の実際を鹿児島県下での実践ー在学アドバイザーの事例ーを通して学ぶ。

第13回 ふれあいサロンと支え合い活動(講義)

地域活動としてのふれあいサロンの背景や実際、その活動を地域支え合いの視点から学ぶ。鹿児島市の実施しているお達者クラブを例にとる。

第14回 地域住民と関係機関の連携

(講義)

地域住民と専門職の連携活動(ネットワークのあり方)の実際を事例に使いながら学ぶ。特に行政と社会福祉協議会が行っている平成24年より実施している暮らし安心地域支え合い活動を事例にとりながら説明する。

第15回 地域福祉活動の推進(講義)

地域福祉活動を進める上でのワークショップ法について、これまでの事例を例に学ぶ。

授業の予習・復習

授業資料は1週間前までにアナウンスができるようにし、自己学習ができるようにしておく。課題等を含め4時間程度の予習・復習を行う必要がある。

使用教材

テキストは特に指定しない。資料配付。参考文献として以下に示す。

- 1.『大都市のひとり暮らし高齢者と社会的孤立』河合克義 法律文化社 2009
- 2.『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』ロバート・D. パットナム(著), Robert D. Putnam(原著), 柴内 康文(翻訳) 柏書房(2006/04)
- 3.『ソーシャルキャピタルー信頼の絆で解く現代経済・社会の諸問題』稲葉陽二2007生産性出版
- 4.『安心社会から信頼社会へー日本型システムの行方』(中公新書) 山岸 俊男 1999
- 5.『プログラム評価入門』マイケル・スミス(著), Michael j.smith(原著), 藤江昌嗣(監訳) 梓出版社(1990)

以下、鹿児島国際大学地域総合研究所の「地域総合研究」でダウンロードできる高橋の参考文献等

<http://www.iuk.ac.jp/chiken/backnumber.html>

研究ノート(PDFファイル)

ひとり暮らし高齢者の社会的孤立ー鹿児島県の過疎地と離島の違いに焦点を当てて

第41巻第1号 /2013年10月

論文

ひとり暮らし高齢者の社会的孤立2

—地方都市、過疎地域、離島における実態— (PDFファイル) 高橋 信行 (1)

第40巻第1号 / 2012年9月

論文

ひとり暮らし高齢者の社会的孤立

—地方都市、過疎地域、離島における実態 (PDFファイル) 高橋 信行 (1)

論文

十島村の地域福祉のあり方

—住み慣れた地域で安心して暮らすこと— (PDFファイル) 高橋 信行 (1)

第39巻第1・2号 合併号 / 2011年12月

地域福祉活動計画と住民参加

—隼人町地域福祉活動計画の軌跡— 高橋信行 (67)

第33巻第2号

評価方法

修了要件

- ・授業の出席100% (やむを得ず講義に出席できない場合はレポートで代替するが、代替できるのは全体の20%を上限とする)。
- ・やむを得ない遅刻は授業開始から30分までとする。30分を過ぎた場合は欠席とする。遅刻3回で欠席1回とみなす。30分以上の早退も同様とする。
- ・最終レポートを提出し合格すること。不合格の場合は1回の再提出を認める。

修了評価

- ・レポート課題の提出。
 - ①地域社会の生活課題・福祉ニーズを理解し、社会資源についてアセスメントができること、それにもとづいて地域介入方法を選択できる力
 - ②地域福祉活動の理解、コーディネートの方法の理解の習熟度を審査する。
 - ・レポート評価は100点満点で評価し、70点以上であること。
- レポートは全体評価の80%として、平常点10%、発表10%とする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

本講義のスタイルは、教員が資料をもとに説明を加え、そののち受講生からの質問に応じるという形式を基本とする。

また視聴覚教材を多用したいと考えている。高橋の方で、行ってきた地域福祉実践の事例も使いたいと考える。

また特定の地域福祉テーマについて議論したい等のリクエストがあれば、できるだけ応じることとしたい。

講義終了後の時間帯をオフィスアワーとして使用する。連絡等が必要な場合は以下のアドレスにお願いしたい。

nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

学生による授業評価は実施していないが、自己評価ではおおむね目標は達成している。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
社会病理学特講	佐野 正彦	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL513680

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会病理学ないし犯罪社会学に関わる基本的視角(パースペクティブ)理解する。

概要

19世紀末のリエンフェルト、デュルケムなどの論者たちに始まり今日に至る社会病理学の発展史のなかで、もっとも大きな理論的画期の一つは、1960年代後半から70年代にかけて席捲した「レイベリング論(labeling theory)」の登場である。この理論の特徴の一つは、犯罪・非行などの社会病理現象をその行為主体の属性やこの主体を取り巻く環境だけに帰属させるのではなく、当該行為を社会病理として認定する専門家などの認定主体をも論及対象として措定しているところにある。本特講の目的は、こうしたレイベリング論のパースペクティブ(視座)を批判的に検討することを主な導きの糸としつつ、社会病理学全般の潮流を理解することにある。本年度は、今後の研究活動の発展と博士後期課程の進学準備に配慮して「英文論文」を少なくとも1本を熟読します。

キーワード

社会病理、逸脱、スティグマ、レッテル貼り、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会病理学ないし犯罪社会学に関わる基本的視角(パースペクティブ)を身につけ社会現象を分析・説明できるようにする。

授業計画

- 第01回 オリエンテーション——「社会病理学」の特徴——
- 第02回 古典学派の犯罪学——ベッカリアとベンサム——
- 第03回 ロンブローゾの実証的犯罪学——人間の異常性とは何かを考える——
- 第04回 デュルケムの犯罪論——犯罪の正常性？！——
- 第05回 社会解体論とシカゴ学派社会学——生態学的視点から犯罪を捉えうること——
- 第06回 文化葛藤論——文化としての犯罪(1)——
- 第07回 分化的接触の理論——文化としての犯罪(2)——
- 第08回 ディーバート: 特定の犯罪論の立場から立論を試みる
- 第09回 マーティンのアノミー論——文化的目標(金銭的成功)と制度的手段(高学歴)——
- 第10回 非行サブカルチャー論——飛行するにも言い分け・理由がある——
- 第11回 分化的機会構造論——朱に交われば赤くなる, 誰もが赤くなるのか？！——
- 第12回 少年の漂流と中和の技術論——善人と悪人の間をドリフトすること, 言い訳がある——
- 第13回 ラベリング論——生まれつき悪人なのか？ 貼られた悪の兆し自己実現——
- 第14回 ハーシのボンド論——絆があれば悪さはしないのか？！ハーシのボンド論
- 第15回 学習した犯罪論・逸脱論の適否を議論し合う。

授業の予習・復習

授業前には該当する箇所を必ず読んでくること。

また、授業後には分かったことと、よく分からなかったことを整理して、理解を深めるように心がけるすること。

使用教材

「英文論文」及び「英文テキスト」をこちらで用意します。ですから、テキストは特に準備しなくてけっこうです。

また、参考文献については、授業中に適宜紹介します。

評価方法

「平常点 50 %、レポート 50 %」の割合で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

英語文献を輪読する形の授業であったのでなかなか大変であったが、訳して考える作業が案外理解を深められたかも知れない。

レッテル貼り(ラベリング論)の英語文献議論を読むことで、これまで自明視されていた「逸脱者＝悪者」的な見方がある程度相対化することができた。

履修者は社会人入試により入学したため、英語に対する苦手意識があると思われるが、この意識を少し壊すことができたように思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
社会福祉調査特講	小窪 輝吉	後期	2

ナンバリングコード

M_WEL510027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習（新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業）

テーマ

社会福祉調査の分析と整理の仕方について学ぶ

概要

データ収集の方法には質問紙調査法、観察法、面接法、記録文書法などがあるが、これらは扱うデータの種類によって量的調査と質的調査に大別される。本講義では社会福祉調査における量的調査・質的調査の実施とデータの整理および調査レポートの作成の仕方を取り上げる。

量的調査では、質問紙法調査のプロセスを概観しながら、データ集計と結果の整理の仕方を中心に実習形式で学んでもらう。具体的にはワードで質問紙を作り、データをエクセルで入力し、統計ソフトであるSPSSやRで集計し、その結果をエクセルで表とグラフに表し、ワードで調査レポートを作るという一連の技法を習得してもらう。質的調査では、質的調査法の概要と質的データの整理方法を中心に扱う。最後に、パワーポイントでの発表の仕方について学ぶ。

課題やレポートについては修正が必要なところをその都度指摘して完成してもらう。

キーワード

量的調査、質的調査、統計ソフト(SPSS、R)、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

調査データの収集と分析・整理ができる。調査レポートを作成することができる。

授業計画

- 第1回 社会福祉調査とは何か。量的調査について
- 第2回 エクセル操作の確認(表と図の作成)
- 第3回 ワード操作の確認(質問紙の作成)
- 第4回 SPSSによるデータ入力とデータのクリーニング
- 第5回 SPSSによるデータ集計1 記述統計代表値
- 第6回 SPSSによるデータ集計2 記述統計クロス集計、相関係数
- 第7回 SPSSによるデータ集計3 推測統計と多変量解析
- 第8回 Rコマンダーによるデータ集計1 データの作成と読み込み
- 第9回 Rコマンダーによるデータ集計2 単純集計、検定
- 第10回 研究レポートの作成1 レポート概要と集計
- 第11回 研究レポートの作成2 集計結果の整理と記述
- 第12回 プレゼンテーション1 スライドの作成
- 第13回 プレゼンテーション2 発表
- 第14回 質的調査について
- 第15回 質的データの整理・分析

授業の予習・復習

パソコンの操作の復習をしておくこと。授業後にはミニレポートを提出すること。
授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキストはありません。以下のものを参考文献とします。

土田昭司・山川栄樹 2011 新・社会調査のためのデータ分析入門 ―実証科学への招待 有斐閣

内田治 2007『すぐわかるSPSSによるアンケートの調査・集計・解析』東京図書

緒賀郷志 2010『Rによる心理・調査データ解析』東京図書

K・F・パンチ 川合隆男監訳 2005 社会調査入門 慶應義塾大学出版会

谷富夫・芦田徹郎編 2009 よくわかる質的調査 技法編 ミネルヴァ書房

新睦人・盛山和夫 2008『社会調査ゼミナール』有斐閣

評価方法

授業中の課題提出(30%)と期末レポート(70%)により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

パソコンの基礎的操作(ファイルのコピー、フォルダ作成等)ができるようにしておいてください。

オフィスアワー等につきましては授業のときにお知らせします。

担当者(小窪)のアドレスは「tkokubo@soc.iuk.ac.jp」です。

前年度の授業評価

レポートの書き方の具体例として参考となる研究論文を提示する。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
フィールドワーク実習	高橋 信行	前期	1

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語による授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

小規模離島における高齢者福祉の地域福祉推進について一住み慣れた地域で安心してくらすこと

概要

小規模離島での高齢者の地域福祉推進を考えると、そこに十分な施設ケアや在宅ケアが用意されているのかについての懸念がある。例えば三島村は、介護保険料が全国の自治体のなかで最低である。よくいえば日本一保険料の安い自治体といえる。島内に保健福祉サービスがほとんどない島、悪く言えばからだが不自由になれば島を出なければならないということかもしれない。地域福祉の理念は、住み慣れた地域で安心して暮らすことである。安い保険料をとるのか、ある程度負担するにしても一定のサービスを求め三島村の福祉計画を確認する必要があるが、三島村は予防的プログラムや住民参加型の事業はどうなっているのか。高齢者に対してニーズ調査を行い、高齢者ニーズを査定するとともに、今後の施策について行政に提言していくことは、他の類似した離島での福祉活動を考えるうえでも大事であろう。

キーワード

地域福祉、高齢者福祉、地域包括ケアシステム、離島、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- 小規模離島での高齢者ニーズの実態を把握する
- 小規模離島での福祉施策の展開方法を学ぶ
- 調査から施策展開のプロセスを学ぶ
- 質的調査法について、理解し、実施できる
- 量的調査法について、理解し、実施できる
- 調査を行い、それを報告書にまとめることができる

授業計画

- 1回 オリエンテーション 社会調査法の基礎理解
- 2回 質的研究法の理解
- 3回 量的研究法の理解
- 4回 調査地域についての基礎理解1
- 5回 調査地域についての基礎理解2
- 6回 調査項目の検討
- 7回 調査方法の選定
- 8回 実査1
- 9回 実査2
- 10回 実査3
- 11回 調査結果の整理集計
- 12回 調査結果の分析(基礎統計)

13回 調査結果の分析(統計解析)

14回 報告書作成1

15回 報告書の完成

授業の予習・復習

当該講義箇所の復習と次回予定箇所のアナウンスを行い、宿題等を課す。事前事後学習を含めて4時間程度を必要とする。

使用教材

授業時に指示する。

評価方法

○授業での平常点 ○調査時のスキル(フィールドワーク) ○集計・分析の力 ○報告書の作成立
それぞれを25%で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

この授業は、学外でのフィールドワーク体験を含む。

調査地は三島村を予定しているが、無理な場合は、類似した小規模離島で行う。

Eメールアドレス 高橋 nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

前年度の報告書などを参考に、改善点を本年度に生かす。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	岩井 浩英	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

子ども家庭ソーシャルワークに関する研究計画の立案

概要

本演習では、ウェルビーイング追求の視点から、子ども家庭ソーシャルワークに関し専門研究的に議論・検討することを目的とする。

※具体的には、各自の研究テーマ等を設定し、研究計画の立案に必要な知識・方法等を学習する。

キーワード

子ども家庭ソーシャルワークに関する専門研究的な議論・検討、研究計画の立案、アクティブラーニング、実務経験のある教員による授業科目

授業の到達目標

1. 各自、自分の研究テーマ等を設定する。
2. 研究計画の立案に必要な知識・方法等を学習する。
3. 子ども家庭ソーシャルワークに関する研究計画を立案する。

授業計画

第1回

- ・オリエンテーション(前期に向けて)

第2回

- ・子ども家庭ソーシャルワークに関する基礎学習a

第3回

- ・子ども家庭ソーシャルワークに関する基礎学習b

第4回

- ・研究方法等演習a

第5回

- ・研究方法等演習b

第6回

- ・研究方法等演習c

第7回

- ・先行研究等調査a

第8回

- ・先行研究等調査b

第9回

- ・先行研究等調査c

第10回

- ・その他の予備学習・演習a

第11回

- ・その他の予備学習・演習b

第12回

- ・研究テーマ等の設定a

第13回

- ・研究テーマ等の設定b

第14回

- ・研究テーマ等の設定c

第15回

- ・前期のまとめ

第16回

- ・オリエンテーション(後期に向けて)

第17回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)a

第18回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)b

第19回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)c

第20回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)d

第21回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)e

第22回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)f

第23回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)g

第24回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)h

第25回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)i

第26回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)j

第27回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)k

第28回

- ・研究(個別指導・研究計画書作成を含む)l

第29回

- ・研究計画書提出

第30回

- ・後期のまとめ

※各回、〔岩井〕専門相談員実務経験に基づく。

授業の予習・復習

○各自、授業前後に合計4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。

○具体的な学修内容は、毎回授業時にそのつど指示する。

使用教材

特記：

○使用教材等は、演習を進めるなかで別途指示する。

評価方法

研究計画書 60%

(随時)レポート等 20%

受講状況 20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- 演習参加において、自分なりの問題・課題意識を常に高めつつ、積極的な取り組みを心がけること。
- 随時課すレポート等課題に対するフィードバックは授業中に行う。
- 上記「評価方法」における「受講状況」とは、受講の意欲・態度や取り組み等を踏まえるものである。
- 授業時間外の対応については、初回授業時に指示する。

※メールアドレス:iwai@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

- 前年度実績を踏まえ、今年度もより良い修士論文指導の工夫を心がける。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導(M2)	岩井 浩英	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

子ども家庭ソーシャルワークに関する修士論文の作成

概要

本演習では、ウェルビーイング追求の視点から、子ども家庭ソーシャルワークに関し専門研究的に議論・検討することを目的とする。

※具体的には、各自の研究計画等に即して、修士論文を作成する。

キーワード

子ども家庭ソーシャルワークに関する専門研究的な議論・検討、修士論文の作成、アクティブラーニング、フィールドワーク、実務経験のある教員による授業科目(専門相談員の実務経験を有する)

授業の到達目標

1. 各自、自分の研究計画等を再確認する。
2. 子ども家庭ソーシャルワークに関する修士論文を作成する。

授業計画

第1回

- ・オリエンテーション(前期に向けて)

第2回

- ・研究計画等の再確認a

第3回

- ・研究計画等の再確認b

第4回(フィールドワーク)

- ・研究(個別指導・修士論文作成を含む)a

第5回(フィールドワーク)

- ・研究(個別指導・修士論文作成を含む)b

第6回(フィールドワーク)

- ・研究(個別指導・修士論文作成を含む)c

第7回(フィールドワーク)

- ・研究(個別指導・修士論文作成を含む)d

第8回(フィールドワーク)

- ・研究(個別指導・修士論文作成を含む)e

第9回(フィールドワーク)

- ・研究(個別指導・修士論文作成を含む)f

第10回(フィールドワーク)

- ・研究(個別指導・修士論文作成を含む)g

第11回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)h
第12回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)i
第13回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)j
第14回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)k
第15回

・前期のまとめ

第16回

・オリエンテーション(後期に向けて)

第17回

・研究内容等の再点検a

第18回

・研究内容等の再点検b

第19回(フィールドワーク)

・研究計画等の再確認a

第20回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)l

第21回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)m

第22回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)n

第23回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)o

第24回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)p

第25回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)q

第26回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)r

第27回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)s

第28回(フィールドワーク)

・研究(個別指導・修士論文作成を含む)t

第29回

・修士論文提出

第30回

・後期のまとめ

※各回、〔岩井〕専門相談員実務経験に基づく。

授業の予習・復習

○各自、授業前後に合計4時間程度の予習・復習を必ず行うこと。

○具体的な学修内容は、毎回授業時にそのつど指示する。

使用教材

特記:

○使用教材等は、演習を進めるなかで別途指示する。

評価方法

修士論文 60%

(随時)レポート等 20%

受講状況 20%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

○演習参加において、自分なりの問題・課題意識を常に高めつつ、積極的な取り組みを心がけること。

○随時課すレポート等課題に対するフィードバックは授業中に行う。

○上記「評価方法」における「受講状況」とは、受講の意欲・態度や取り組み等を踏まえるものである。

○授業時間外の対応については、初回授業時に指示する。

※メールアドレス:iwai@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

○今年度より、新規担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	岩崎 房子	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

高齢者保健福祉(域包括ケア含む)等に関する研究をおこない、修士論文の作成に必要な知識・研究方法を学習する。

概要

- ・論文作成の方法について学ぶ。
- ・レポート、課題等に関しては、授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

論文作成、高齢者保健福祉、地域包括ケア、アクティブ・ラーニング、「実務経験のある教員による授業科目(看護師の実務経験を有する)」

授業の到達目標

- ・関心のある高齢者保健福祉等に関する知識を理解している。
- ・論文作成に必要な知識・研究方法を理解している。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(大学院での学習について)
- 第2回 オリエンテーション(論文について)
- 第3回 関心のあるテーマについての意見交換
- 第4回 一つのテーマでの意見交換
- 第5回 文献検索(検索の基本)
- 第6回 文献検索(テーマに関する文献検索)
- 第7回 文献検索(収集資料に基づく検討)
- 第8回 文献の読解(読解の方法)
- 第9回 文献の読解(プレゼン)
- 第10回 文献の読解(意見交換)
- 第11回 研究計画の検討(論文の構造)
- 第12回 研究計画の検討(研究方法)
- 第13回 研究計画の検討(研究の手順)
- 第14回 進捗状況の確認(アドバイス等)
- 第15回 進捗状況の確認(確認等)
- 第16回 文献検索(資料収集の追加)
- 第17回 文献検索(文献一覧)
- 第18回 研究の展開(文献または調査研究)
- 第19回 研究の展開(研究計画の確認)
- 第20回 研究の展開(具体的な進行①)
- 第21回 研究の展開(具体的な進行②)

- 第22回 研究の展開(継続的な進行①)
- 第23回 研究の展開(継続的な進行②)
- 第24回 研究の展開(進捗状況の確認等)
- 第25回 研究の展開(継続的な進行、確認等)
- 第26回 文章の書き方(基本の理解)
- 第27回 文章の書き方(具体的な進行)
- 第28回 文章の書き方(確認等)
- 第29回 パソコン操作の確認(基本操作)
- 第30回 パソコン操作の確認(応用学習)

※レポート課題等に対しては、授業時またはEメールによりフィードバックを行う予定です。

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前:次回のテーマに関する資料収集・読解等、授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

授業開始時等に提示する。

評価方法

演習での平常点60%、提出原稿等40%。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業計画等に変更する場合があります。
- ・オフィスアワー等については、授業開始時などに指示します。
- ・Eメールアドレス:fiwasaki@soc.iuk.ac.jp
- ・レポートや課題に関しては、授業時またはEメールでフィードバックします。

前年度の授業評価

開講初年度のため実績なし

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	小窪 輝吉	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

実証的な社会福祉研究について学び、修士論文作成の計画を立てる。

概要

社会心理学の領域の研究論文を題材にして実証的な研究スタイルを学ぶ。具体的には、社会福祉学と心理学の境界領域のテーマである生きがい感、幸福感、孤独感、社会的居場所感など個人の態度や行動と精神的健康の関連性に関する研究、あるいはリーダーシップ、チームワーク、職場ストレスなど集団・組織行動に関する研究の進め方と論文へのまとめ方を学ぶ。

研究テーマが固まり次第、先行研究の検討を行い、研究計画作成を行う。

授業では質疑応答の時間を多く取り入れる。

キーワード

社会心理学、社会福祉調査、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

実証的な社会福祉研究に関する論文を理解できる。修士論文作成の計画を立てることができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・講義計画
- 第2回 図書検索の練習
- 第3回 図書検索
- 第4回 論文検索の練習
- 第5回 論文検索
- 第6回 論文の読み合わせ
- 第7回 論文のレジュメ作成
- 第8回 論文の発表
- 第9回 社会心理学の研究論文の検索
- 第10回 社会心理学の研究論文のレジュメ作成
- 第11回 社会心理学の研究論文の発表
- 第12回 研究テーマの検討
- 第13回 研究方法の検討
- 第14回 研究計画の検討
- 第15回 研究テーマの発表
- 第16回 研究テーマに関する論文の読み合わせ1
- 第17回 研究テーマに関する論文のレジュメ作成1
- 第18回 研究テーマに関する論文の発表1
- 第19回 研究テーマに関する論文の読み合わせ2

- 第20回 研究テーマに関する論文のレジュメ作成
- 第21回 研究テーマに関する論文の発表
- 第22回 研究計画書の検討
- 第23回 研究計画書の下書き
- 第24回 研究計画書の作成
- 第25回 調査項目の検討
- 第26回 調査項目の下書き
- 第27回 調査項目の作成
- 第28回 調査依頼書の作成
- 第29回 教育研究倫理委員会提出書類の作成
- 第30回 研究計画の発表

授業の予習・復習

授業課題をしておくこと。習ったことを自分の論文作成に関連づけて復習すること。
毎授業後にはミニレポートを提出すること。
授業前後に必ず合計で4時間程度の予習・復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。適宜関連資料を配布する。

評価方法

修士論文作成のための研究計画書により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

論文作成に充てる時間を自分で確保するようにしてください。
用件があればまずはメールで連絡して下さい。アドレスは「tkokubo@soc.iuk.ac.jp」です。

前年度の授業評価

修士論文の研究方法に合わせて指導内容を微調整した。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導(M2)	小窪 輝吉	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

実証的な社会福祉研究を行い、修士論文を提出する。

概要

実証的な社会福祉研究を実施して、データの分析と整理をし、修士論文にまとめる。

キーワード

社会福祉調査、データ分析、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会福祉調査を実施できる。調査データをもとに修士論文を書くことができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション・講義計画
- 第2回 調査票の検討
- 第3回 調査票の下書き
- 第4回 調査票の作成
- 第5回 調査票の印刷
- 第6回 調査依頼文書の下書き
- 第7回 調査依頼文書の作成
- 第8回 調査票発送の準備
- 第9回 調査票発送
- 第10回 データフォームの作成
- 第11回 データ分析方針の確認
- 第12回 回収調査票のデータのチェック
- 第13回 データ入力
- 第14回 データの定義
- 第15回 データ分析1
- 第16回 データ分析2
- 第17回 データ分析3
- 第18回 データ分析4
- 第19回 分析結果の整理1
- 第20回 分析結果の整理2
- 第21回 分析結果の整理3
- 第22回 修士論文の作成1
- 第23回 修士論文の作成2

- 第24回 修士論文の作成3
- 第25回 修士論文の作成4
- 第26回 修士論文の修正5
- 第27回 修士論文の修正6
- 第28回 修士論文完成
- 第29回 修士論文発表の準備
- 第30回 修士論文発表の練習

授業の予習・復習

授業時間外に多くの時間を割いて調査の準備、論文作成等にあてること。

使用教材

テキストは使用しない。適宜関連資料を配布する。

評価方法

修士論文により評価する

履修上の留意事項・授業時間外の対応

用件があればまずはメールで連絡して下さい。アドレスは「tkokubo@soc.iuk.ac.jp」です。

前年度の授業評価

前年度の授業はなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	佐野 正彦	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業。

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会病理学や犯罪社会学の基本的な視角を理解する。

概要

本演習では、「社会病理学特講」で学んだ内容をさらに理論的に深化させることを目指す。現代日本社会には〈社会病理〉や〈社会問題〉と呼ぶにふさわしいさまざまな事件や出来事が発生している。本演習の主眼は、「社会病理学特講」で学んだレイベリング論などの諸理論の理解をさらに深め、こうした諸理論がさまざまな〈社会病理〉や〈社会問題〉にいかに関与・適用しうるのかを批判的に検討することにある。本演習に参加する各人は具体的な個別テーマを自ら設定し、担当教員はそれについて修士論文を作成できるよう個人指導を行う。

キーワード

社会病理、逸脱、同調、レッテル貼り、スティグマ、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会病理学や犯罪社会学の視角を用いて、如何に研究対象に切り込んでいくかを考え、実践できるようにする。

授業計画

ここでは社会学の基本を学ぶとともに「社会病理論特講」で用いたテキストをしっかりと理解するように努める。

- 第01回 オリエンテーション
- 第02回 社会学の基本概念 〈人間〉とはどのような生き物か？
- 第03回 社会学の基本概念 意味に生きる〈人間〉
- 第04回 社会学の基本概念 〈人間〉はどのように世界を捉えているのか？
- 第05回 社会学の基本概念 〈人間〉に〈本能〉はあるのか？
- 第06回 社会学の基本概念 絶対的価値観と相対的価値観
- 第07回 社会学の基本概念 アイデンティティの確立と〈文化〉
- 第08回 社会学の基本概念 何歳から〈青年期〉になるのか？
- 第09回 社会学の基本概念 社会学の時間概念:〈近代〉と〈前近代〉
- 第10回 社会学の基本概念 社会学の時間概念:〈近代〉と〈現代〉
- 第11回 社会学の基本概念 大衆社会論
- 第12回 社会学の基本概念 フーコーの〈権力論〉
- 第13回 社会学の基本概念 構造・機能・システム①
- 第14回 社会学の基本概念 構造・機能・システム②
- 第15回 前期のまとめ－何を学んだのか－
- 第16回 オリエンテーション－後期に何をするか－

- 第17回 社会病理学の基本概念 生来性犯罪人とイタリア犯罪人類学
- 第18回 社会病理学の基本概念 社会解体論①
- 第19回 社会病理学の基本概念 社会解体論②
- 第20回 社会病理学の基本概念 デュルケム犯罪学とアノミー論
- 第21回 社会病理学の基本概念 マートンの犯罪論
- 第22回 社会病理学の基本概念 自己観念と犯罪
- 第23回 社会病理学の基本概念 非行中和化の技術
- 第24回 社会病理学の基本概念 サザランドの分化的接触理論
- 第25回 社会病理学の基本概念 マルクス主義と犯罪論
- 第26回 アメリカン・ドリームと犯罪
- 第27回 シカゴという町ー産業とマフィアー
- 第28回 割れ窓理論
- 第29回 犯罪環境論と犯罪機会論
- 第30回 〈近現代人〉の正常と異常

授業の予習・復習

授業前には該当部分の予習に2時間以上かけて行うこと。

授業後には、よく理解できなかったことを明確にしたうえで、そのことについて自己学習につとめること。

使用教材

社会病理学の理解度を高めるため、社会病理学特講で用いた教材を再読する。

修士論文執筆にかかわる基本書・参考文献などについては、研究・執筆の進捗状況にしたがって適宜指示する。

評価方法

修士論文作成に至る過程のなかで「口頭報告50%、レポート提出50%」で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

履修者が体調不良であったため、計画的な授業運営ができなかった。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習) 修士論文指導(M2)	佐野 正彦	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

広くは社会学の視角, 直接的には社会病理学や犯罪社会学の視角を用いて、如何に研究対象に切り込んでいくかを考え、実践できるようにする。

概要

本演習では、「社会病理学特講」で学んだ内容をさらに理論的に深化させることを目指します。現代日本社会には〈社会病理〉や〈社会問題〉と呼ぶにふさわしいさまざまな事件や出来事が発生している。本演習の主眼は、「社会病理学特講」で学んだレイベリング論などの諸理論・諸視角の理解をさらに深め、こうした諸理論・諸視角がさまざまな〈社会病理〉や〈社会問題〉にいかに関与・適用しているのかを批判的に検討することにあります。本演習に参画する各人は、具体的な個別テーマを自ら設定したうえで、担当教員はそれについて修士論文を作成できるよう個人指導していきます。

キーワード

社会学的視角, レッテル貼り(ラベリング), スティグマ, 夜警国家の消滅?!, 行政国家と福祉国家の両立, アクティヴ・ラーニング

授業の到達目標

社会学的思考内容と社会病理学・逸脱の社会学などの基本的な視角をしっかりと理解・習得したうえで、自己の具体的なテーマに臨み、その構造と問題を自分の言葉で表現できるようにし、最終的に修士論文作成に結びつけていけるようにする。

授業計画

ここでは社会学の基本を学ぶとともに「社会病理学特講」で用いたテキストをしっかりと理解するように努め、その応用を目指す。

- 第01回 オリエンテーション——基本論を大切に——
- 第02回 社会学の基本概念——〈人間〉とはどのような生き物か? ——
- 第03回 社会学の基本概念——意味に生きる〈人間〉——
- 第04回 社会学の基本概念——〈人間〉はどのように世界を捉えているのか? ——
- 第05回 社会学の基本概念——〈人間〉に〈本能〉はあるのか? ——
- 第06回 社会学の基本概念——絶対的価値観と相対的価値観——
- 第07回 社会学の基本概念——アイデンティティの確立と〈文化〉——
- 第08回 社会学の基本概念——何歳から〈青年期〉になるのか? ——
- 第09回 社会学の基本概念——社会学の時間概念:〈近代〉と〈前近代〉——
- 第10回 社会学の基本概念——社会学の時間概念:〈近代〉と〈現代〉——
- 第11回 社会学の基本概念——大衆社会論——
- 第12回 社会学の基本概念フーコーの〈権力論〉
- 第13回 社会学の基本概念——構造・機能・システム①——

- 第14回 社会学の基本概念——構造・機能・システム②
- 第15回 前期のまとめ——何を学んだのか——
- 第16回 オリエンテーション——後期に何をするか——
- 第17回 社会病理学の基本概念——生来性犯罪人とイタリア犯罪人類学——
- 第18回 社会病理学の基本概念——社会解体論①——
- 第19回 社会病理学の基本概念——社会解体論②——
- 第20回 社会病理学の基本概念——デュルケム犯罪学とアノミー論——
- 第21回 社会病理学の基本概念——マートンの犯罪論——
- 第22回 社会病理学の基本概念——自己観念と犯罪——
- 第23回 社会病理学の基本概念——非行中和化の技術——
- 第24回 社会病理学の基本概念——サザランドの分化的接触理論——
- 第25回 社会病理学の基本概念——マルクス主義と犯罪論——
- 第26回 マートンの犯罪論Ⅱ——アメリカン・ドリームと犯罪——
- 第27回 犯罪論と都市①——シカゴ：産業とマフィア——
- 第28回 犯罪論と都市②——ニューヨーク：割れ窓理論——
- 第29回 犯罪論と都市③——犯罪環境論と犯罪機会論——
- 第30回 〈近＝現代人〉の正常と異常とは何か？

授業の予習・復習

授業の進捗にあわせて必ず予習してください。また、必ず復習もしてください。授業で学んだことの中で不確かな点やさらに理解や論点深めたい場合は復習の中での解決を目指すとともに、適宜質問してアドバイスを求めて下さい。

使用教材

社会病理学や逸脱の社会学などの理解度を高めるため、「社会病理学特講」で用いた教材を再読したいと思います。

また、修士論文執筆にかかわる基本書・参考文献などについては、研究・執筆の進捗状況にしたがって適宜指示したいと思います。

評価方法

修士論文作成に真摯に取り組むことを前提に、作成した修士論文の体系性、独創性、堅実性、周到性などの観点から判定し、評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

事前に基礎となる社会学の入門書と社会病理学・犯罪学入門書などを学習しておくことが望ましい。欠席と遅刻の理由を伝えて欲しいと思います。なんとなく欠席してしまう人はやめて下さい。

何か質問や相談事項がある場合は、とりあえず次のメール連絡して下さい。

メールアドレス: msano@soc.iuk.ac.jp

また、オフィスアワーを設けますので、これも利用して下さい。

前年度の授業評価

特に個別的に行われていないが、「大学院全体」について学生から授業評価を受けている。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	高橋 信行	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

プログラム評価およびアクションリサーチを理解したうえで修士論文を作成する。

概要

修士論文作成の予備的作業として、研究法の解説を中心に行う。これらを通して、地域福祉実践の現状と理論的枠組みについて考えるとともに、研究論文作成の過程についても検討していく予定である。事例研究や調査手法などが弱い場合は、順次それらについての情報提供やスキルアップのためのメニューを用意する予定である。課題については、コメント等を通してフィードバックを行う。

キーワード

アクティブ・ラーニング、プログラム評価、アクションリサーチ

授業の到達目標

研究法としての質的研究法、及び量的研究法を理解し、実態調査と効果測定調査について研究に活かすことができる。

授業計画

- 1回 オリエンテーション／研究するということープログラム評価とアクションリサーチ
- 2回 アクションリサーチ(以下AR)を学ぶー専門的活動と公的活動における研究
- 3回 ARの理論と原則／学生テーマ討議
- 4回 AR舞台を設定する:研究プロセスを計画する／学生テーマ討議
- 5回 AR見る:見取り図を作る／学生テーマ討議
- 6回 AR考える:解釈し、分析する／学生テーマ討議
- 7回 AR行動する:問題を解決するー計画し、持続可能な解決方法を講じる／学生テーマ討議
- 8回 持続可能な変化と発展をめざす戦略的計画 /学生テーマ討議
- 9回 AR形式の整った報告書／学生テーマ討議
- 10回 ARを理解する／学生テーマ討議
- 11回 ARのまとめ1／学生テーマ討議
- 12回 ARのまとめ2／学生テーマ討議
- 13回 学生発議による討論1／論文指導
- 14回 学生発議による討論2／論文指導
- 15回 学生発議による討論3／論文指導
- 16回 質的研究法を学ぶ1／学生テーマ討議
- 17回 質的研究法を学ぶ2／学生テーマ討議
- 18回 質的研究法を学ぶ3／学生テーマ討議
- 19回 質的研究法を学ぶ4／学生テーマ討議
- 20回 量的研究法を学ぶ1／学生テーマ討議

- 21回 量的研究法を学ぶ2／学生テーマ討議
- 22回 量的研究法を学ぶ3／学生テーマ討議
- 23回 プログラム評価概論1／学生テーマ討議
- 24回 プログラム評価概論2／学生テーマ討議
- 25回 プログラム評価概論3／学生テーマ討議
- 26回 プログラム評価概論4／学生テーマ討議
- 27回 プログラム評価概論5／学生テーマ討議
- 28回 プログラム評価概論6／学生テーマ討議
- 29回 プログラム評価概論7／学生テーマ討議
- 30回 プログラム評価概論8／学生テーマ討議

授業の予習・復習

授業時に課題として提示する。事前に資料を配布して、予習を行う。事前事後学習を含め4時間程度を必要とする。

使用教材

ストリンガー『アクション・リサーチ』目黒輝美・磯部卓三(監訳)発行フィリア 発売星雲社
萱間真美 『質的研究実践ノート 研究プロセスを勧めるclueとポイント』医学書院2007
木下康仁 『ライブ講義M-GTA ー実践的質的研究法』弘文堂 2007
小田利勝 『ウルトラ・ビギナーのためのSPSS統計解析入門』2007
マイケル・スミス『プログラム評価入門』,Michael j.smith(原著),藤江昌嗣(監訳)梓出版社(1990)

※参考書については、演習の中で示します。

評価方法

受講姿勢やレポートの内容により評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業計画は質的研究法を中心にしているが、量的研究法についても演習を行いたいと考える。

前年度の授業評価

授業評価アンケートは実施していないが、おおむねシラバスに沿った満足のいく授業が展開できたと思う。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導(M2)	高橋 信行	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

研究方法としての質的研究法、量的研究方法、およびアクションリサーチ、プログラム評価法を理解したうえで修士論文を作成する。

概要

修士論文作成の予備的作業として、研究方法の解説を中心に行う。これらを通して、地域福祉実践の現状と理論的枠組みについて考えるとともに、研究論文作成の過程についても検討していく予定である。事例研究や調査手法などが弱い場合は、順次それらについての情報提供やスキルアップのためのメニューを用意する予定である。

キーワード

アクティブ・ラーニング、アクションリサーチ、コミュニティワーク

授業の到達目標

研究方法としての質的研究法、及び量的研究方法を理解し、研究に活かすことができる。

授業計画

- 1回 オリエンテーション／研究するということープログラム評価とアクションリサーチ
- 2回 アクションリサーチ(以下AR)を学ぶー専門的活動と公的活動における研究
- 3回 ARの理論と原則／学生テーマ討議
- 4回 AR舞台を設定する:研究プロセスを計画する／学生テーマ討議
- 5回 AR見る:見取り図を作る／学生テーマ討議
- 6回 AR考える:解釈し、分析する／学生テーマ討議
- 7回 AR行動する:問題を解決するー計画し、持続可能な解決方法を講じる／学生テーマ討議
- 8回 持続可能な変化と発展をめざす戦略的計画 / 学生テーマ討議
- 9回 AR形式の整った報告書／学生テーマ討議
- 10回 ARを理解する／学生テーマ討議
- 11回 ARのまとめ1／学生テーマ討議
- 12回 ARのまとめ2／学生テーマ討議
- 13回 学生発議による討論1／論文指導
- 14回 学生発議による討論2／論文指導
- 15回 学生発議による討論3／論文指導
- 16回 質的研究法を学ぶ1／学生テーマ討議
- 17回 質的研究法を学ぶ2／学生テーマ討議
- 18回 質的研究法を学ぶ3／学生テーマ討議
- 19回 質的研究法を学ぶ4／学生テーマ討議
- 20回 量的研究方法を学ぶ1／学生テーマ討議

- 21回 量的研究法を学ぶ2／学生テーマ討議
- 22回 量的研究法を学ぶ3／学生テーマ討議
- 23回 プログラム評価概論1／学生テーマ討議
- 24回 プログラム評価概論2／学生テーマ討議
- 25回 プログラム評価概論3／学生テーマ討議
- 26回 プログラム評価概論4／学生テーマ討議
- 27回 プログラム評価概論5／学生テーマ討議
- 28回 プログラム評価概論6／学生テーマ討議
- 29回 プログラム評価概論7／学生テーマ討議
- 30回 プログラム評価概論8／学生テーマ討議

授業の予習・復習

授業時に課題として提示する。前の週に資料を提供し、事前学習を行う。事前学習・事後学習を含め4時間程度を確保する。

使用教材

ストリンガー『アクション・リサーチ』目黒輝美・磯部卓三(監訳)発行フィリア 発売星雲社
萱間真美 『質的研究実践ノート 研究プロセスを勧めるclueとポイント』医学書院2007
木下康仁 『ライブ講義M-GTA ー実践的質的研究法』弘文堂 2007
小田利勝 『ウルトラ・ビギナーのためのSPSS統計解析入門』2007
マイケル・スミス『プログラム評価入門』,Michael j.smith(原著),藤江昌嗣(監訳)梓出版社(1990)
※参考書については、演習の中で示します。

評価方法

受講姿勢(20%)やレポートの内容(80%)により評価を行う。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業計画は質的研究法を中心にしているが、量的研究法についても演習を行いたいと考える。
オフィースアワーは授業終了後に設定する。連絡が必要な場合は以下のアドレスに連絡をすること。
nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

おおむねシラバスに即した授業ができた。学生のニーズをくみ取りながら、要望に沿うことができた。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導(M2)	田中 安平	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う講義

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

課題を自ら設定し、設定した課題解決の方策を論文として仕上げる手順等についての学びを深める。(出来上がった論文は福祉現場に還元できることを目標とする。絵に描いた餅は無意味である。)

概要

2年間という修士課程期間は長いようで短いものである。本講座は、まず初めに修論テーマ(現場における課題等)を決める事から始める。書き上げる修論が福祉(実践)現場にフィードバックできる内容となることで、勤務しながら学び続ける意欲につながり、修論の完成までへとつながるのである。

テーマ(目標)が決まると、テーマに関する先行研究をレビューする。様々な先行研究をレビューするなかで、修論の骨格である章立て・節を決めていく(可能なら8月頃、遅くとも10月をめどに)。

アンケート(量的)調査を予定している場合には、遅くとも年度末(翌年の1～3月)までには調査を実行できるようになっていなければならない。(調査開始1～2か月前には本大学の教育研究倫理委員会の審査を受けることが大切である。)

この間、書き上げた原稿に対してその都度フィードバックをしていき、論文の書き方、体裁等について学ぶ。

キーワード

先行研究 フィードバック 臨床福祉 質的・量的調査 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

実践の学問である社会福祉・介護における課題を自ら設定し、設定した課題解決の方策を理解するとともに身につける。

修論を作成する中で、論文の書き方、レビューの仕方、先行研究の方法等を身につけ、実践できるようになる。

アンケート(量的・質的)調査を実践し、分析できるようになる。

授業計画

第1回オリエンテーション

第2回事前に決定していた修論テーマの妥当性についての検討

第3回事前のテーマに類する先行文献検討

第4回先行文献検討・テーマの決定

第5回先行文献検討・章立て、節の検討

第6回先行文献検討

第7回質的・量的調査について指導・研究計画の検討

第8回研究計画の仮決定

第9回先行文献検討

第10回先行文献検討

第11回修士論文作成指導(執筆要領)①

第12回修士論文作成指導(注や引用文献の書き方)②

第13回修士論文作成指導(アンケート用紙作成)③
第14回先行文献検討・臨床への影響
第15回先行文献検討・臨床への影響
第16回修士論文作成指導(臨床への妥当性)・論文部分的作成
第17回修士論文作成指導(臨床への妥当性)・論文部分的作成
第18回修士論文作成指導(臨床改善)・論文部分的作成
第19回修士論文作成指導(臨床改善)・論文部分的作成
第20回研究方法の見直し・修正
第21回研究方法の決定、関連する研究論文(研究ノート)発表
第22回文献・調査等研究経過報告
第23回文献・調査等研究経過報告指導
第24回文献・調査等研究経過報告
第25回文献・調査等研究経過報告指導
第26回研究方法の見直し・修正
第27回研究方法の決定
第28回研究計画の見直し・修正
第29回研究計画の決定
第30回修士論文作成開始

授業の予習・復習

現場における実践内容を「なぜ」「どうしたら」という思考で常に分析することが実践学では大切である。「なぜ」「どうしたら」という状況を常に文章化し、最善の解決方法はどうかを明確化してくる。この繰り返しの中から模範解答のない正解を見つけることが可能になり、論文としてまとめることが出来るのである。

使用教材

特定のテキストは使用しない。適宜指示する。

評価方法

授業時の取り組み40%、事例検討や文献研究のあり方30%、目標の達成状況30%等により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業に対する熱意等の評価は、減算により評価する(最大30%)。

疑問等、相談に関してはいつでも研究室に來られたし。時間的制約がある場合は、以下のメールでの対応も可能である。

yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

前年度の授業評価は実施していないが、院生の現場実践にフィードバックでき、修論作成に結びつくゼミとした。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	千々岩 弘一	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

教育分野に軸足を置いた修士論文の作成

概要

受講生の研究テーマに即して、教育に関する専門的な追究をしていく。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:

自己の関心・問題意識に基づいて設定した研究テーマに即して、先行研究を踏まえつつ、新しい時代に資する提言を修士論文としてまとめることができる。

授業計画

第1回オリエンテーション(演習の目的・目標、内容、方法、評価などに関する説明)

第2回修士論文研究テーマの設定1

第3回修士論文研究テーマの設定2

第4回修士論文研究方法の確認

第5回修士論文構成の立案1

第6回修士論文構成の立案2

第7回修士論文参考文献リストの作成に関する助言

第8回修士論文草稿の作成1(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第9回修士論文草稿の作成2(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第10回修士論文草稿の作成3(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第11回修士論文草稿の作成4(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第12回修士論文草稿の作成5(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第13回修士論文研究方法の再確認

第14回修士論文草稿の作成6(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第15回修士論文草稿の作成7(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第16回修士論文草稿の作成8(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第17回修士論文草稿の作成9(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第18回修士論文草稿の作成10(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第19回修士論文草稿の作成11(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第20回修士論文草稿の作成12(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第21回修士論文草稿の作成13(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第22回修士論文草稿の作成14(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第23回修士論文草稿の完成1(完成した修士論文の報告とそれに対する助言)

第24回修士論文の完成2(修正した修士論文の報告とそれに対する助言)

第25回修士論文の校正1

第26回修士論文の校正2

第27回修士論文の校正3

第28回修士論文の完成

第29回口頭試問準備①

第30回口頭試問準備②

以上のような内容で、学生一人一人の関心や問題意識に基づいて設定された研究テーマについて追究していく。

授業の予習・復習

助言に合わせて、必要に応じて文献による考察を深めること。

文献による考察の質的深まりの確認は、次時の指導時間に行う。

使用教材

必要に応じて、基本文献・参考文献に関する助言を行う。

評価方法

受講態度及び研究発表、修士論文の質で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

相談がある場合は、アポイントを取ったうえで遠慮なく相談してください。

前年度の授業評価

前年度は開講しておらず、授業評価は行っていない。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	茶屋道 拓哉	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

メンタルヘルスソーシャルワークに関する修士論文作成のための研究指導

概要

大学院における受講科目で得た基礎知識ならびに研究領域に関する問題意識・臨床疑問を念頭に置きながら、研究(修士論文作成)を遂行する。

社会調査法を用いた研究課題の決定、研究デザイン作成、調査実施、データ解析、論文執筆、等の各過程における 具体的手順と考え方を修得し修士論文作成を行う。

キーワード

メンタルヘルスソーシャルワーク、先行研究の精査、批判的検討、研究デザイン、社会調査(質的研究)、実務経験のある教員による授業科目(社会福祉士・精神保健福祉士としてのソーシャルワーク実践)

授業の到達目標

- ①メンタルヘルスにかかる諸問題をソーシャルワークの視点で解釈し、先行研究と結び付けて考えることができる。
- ②ソーシャルワーク関連領域で使用される研究方法を活用し、現象の分析を行い、考察を深めることで修士論文を完成させる。

授業計画

- 第01回 問題意識の発掘と醸成
- 第02回 問題意識から研究テーマへ(臨床疑問と研究疑問)
- 第03回 良い研究テーマとは(研究テーマの具体例)
- 第04回 研究テーマと仮説(仮説創設と仮説検証)
- 第05回 研究テーマの決定
- 第06回 文献レビューの意味と方法
- 第07回 文献レビューの具体例
- 第08回 文献の批判的検討
- 第09回 研究デザインとは何か
- 第10回 研究デザインの検討
- 第11回 研究デザインの決定
- 第12回 社会調査法概説
- 第13回 質的研究方法論①
- 第14回 質的研究方法論②
- 第15回 質的研究方法論③
- 第16回 調査手法の検討
- 第17回 調査手法の決定
- 第18回 質的調査の実施①

- 第19回 質的調査の実施②
- 第20回 質的調査の実施③
- 第21回 質的データの分析①
- 第22回 質的データの分析②
- 第23回 質的データの分析③
- 第24回 分析結果の評価
- 第25回 論文執筆①(緒言・対象と方法)
- 第26回 論文執筆②(結果)
- 第27回 論文執筆③(考察)
- 第28回 論文執筆④(文献の効果的な引用)
- 第29回 論文執筆⑤(抄録作成とプレゼンテーション)
- 第30回 研究目的達成度の確認と振り返り

授業の予習・復習

修士論文の作成に向けた科目であるため、授業の進捗に合わせて主体的に事前の予備学習・復習に取り組むこと(4時間程度)

毎時間、各院生の進捗を確認するため、報告できる内容のレジュメを準備して臨むこと。

使用教材

テキストは指定しませんが、以下の資料等を基に学修を進める予定です。

北川清一・佐藤豊道編『ソーシャルワークの研究手法～実践の科学化と理論化を目指して』2010年, 相川書房.

岩田正美ほか編集『社会福祉研究法～現実世界に迫る14レッスン～』2006年, 有斐閣アルマ.

木下康仁著『ライブ講義M-GTA～実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて～』2007年, 弘文堂.

Uwe Flick著・小田博志ほか訳『質的研究入門～“人間の科学”のための方法論～』2011年, 春秋社.

評価方法

講義時の課題に対するレジュメ(20%), 修士論文(80%)で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは受講生と相談しながら決めていく。

前年度の授業評価

今年度より新規担当。

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	松元 泰英	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

論文の書き方を学び、実際に修士論文を書く

概要

論文の書き方について理解し、実際に論文を書く。

キーワード

エビデンス 統計 KH-Coder SPSS 文献データベース アクティブ・ラーニング 実務経験のある教員による授業科目(特別支援学校教諭の経験を有する)

授業の到達目標

自ら研究内容や方法等を考え、研究実践を行い、その結果を考察し発表できる

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究の目的
- 第3回 過去の研究(1:データベースの活用方法)
- 第4回 統計学について(SPSS)
- 第5回 統計学について(SPSS)
- 第6回 統計学について(KH-Coder)
- 第7回 統計学について(KH-Coder)
- 第8回 研究の目的
- 第9回 研究の内容
- 第10回 研究の実際(1:はじめに)
- 第11回 研究の実際(2:研究の目的)
- 第12回 研究の実際(3:研究の目的)
- 第13回 研究の実際(4:研究の方法)
- 第14回 研究の実際(5:研究の方法)
- 第15回 研究の実際(6:研究の結果)
- 第16回 研究の実際(7:研究の結果)
- 第17回 研究の実際(8:研究の結論)
- 第18回 研究の実際(9:研究の考察)
- 第19回 研究の実際(10:抄録)
- 第20回 研究の結果(1:結果に対する意見・討論)
- 第21回 研究の結果(2:意見に対する修正)
- 第22回 研究の考察(1:研究からの)
- 第23回 研究の考察(2:過去の研究との比較検討)

- 第24回 研究の課題(1:今後の研究)
- 第25回 研究の課題(2:研究の反省)
- 第26回 研究の報告準備(1:プレゼンソフトの利用法)
- 第27回 研究の報告準備(2:効果的なプレゼンソフトの活用法)
- 第28回 研究の報告準備(3:プレゼンの実際)
- 第29回 研究の報告・討論
- 第30回 研究の最終確認

授業の予習・復習

基本的には、自分自身で研究実践は進めていく。この論文指導の時間は、教員との論文の方向性や結果の確認の時間とする。そのため、毎授業前に、授業で話し合う内容の資料を完成しておくこと。基本的に、授業前後には4時間程度の予習復習を行うこと。

使用教材

統計資料 学生の持参する研究結果及び資料

評価方法

修士論文審査

履修上の留意事項・授業時間外の対応

論文の書き方や実践方法については必要に応じて随時研究室を訪問してもらう

前年度の授業評価

大学院博士課程前期が一人在籍

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習) 修士論文指導(M2)	松元 泰英	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討議型授業)

テーマ

論文の書き方を学び、実際に論文を書く

概要

論文の書き方について理解し、実際に論文を書く

キーワード

エビデンス、統計、SPSS、KH-Coder 文献データベース アクティブ・ラーニング 実務経験のある教員による
授業科目(特別支援学校教諭の経験を有する)

授業の到達目標

自ら研究内容、方法等を考え、研究実践を行いその結果を考察し、発表できる

授業計画

- 第1回 1年次の振り返り
- 第2回 研究の再確認(研究の方法)
- 第3回 研究の再確認(研究の方法)
- 第4回 研究の再確認(研究の内容)
- 第5回 研究の再確認(研究の内容)
- 第6回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第7回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第8回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第9回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第10回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第11回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第12回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第13回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第14回 研究の実際(論文の読み合わせ)
- 第15回 研究の実際(前期のまとめ)
- 第16回 研究の実際(中間報告のプレゼン作り)
- 第17回 研究の実際(中間報告のプレゼン作り)
- 第18回 研究の実際(中間報告のプレゼン作り)
- 第19回 研究の実際(中間報告のプレゼン作り)
- 第20回 研究の実際(中間報告での指摘に対する修正)
- 第21回 研究の実際(中間報告での指摘に対する修正)
- 第22回 研究の実際(中間報告での指摘に対する修正)
- 第23回 研究の実際(中間報告での指摘に対する修正)

- 第24回 研究の実際(研究の結果)
- 第25回 研究の実際(研究の考察)
- 第26回 研究の実際(研究の反省)
- 第27回 研究の実際(修士論文のまとめ)
- 第28回 研究の実際(修士論文のまとめ)
- 第29回 研究の実際(修士論文のまとめ)
- 第30回 研究のまとめ

授業の予習・復習

基本的には、自分自身で研究実践は進めていく。論文指導の時間は、教員との修士論文の方向性や結果の確認の時間とする。そのため、授業時間前には、必ず授業で話し合う内容の資料を完成しておくこと。また、授業の前後には4時間程度の予習復習を行うこと。

使用教材

統計資料 学生の持参する研究結果及び資料

評価方法

修士論文審査

履修上の留意事項・授業時間外の対応

論文の書き方や実践方法については必要に応じて随時研究室を訪問すること

前年度の授業評価

受講者なし

科 目 名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(演習)修士論文指導	吉留 久晴	1～2年次	8

ナンバリングコード

M_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

教育・学校問題の研究

概要

本演習で、受講生は教育学研究法の手ほどき・指導を受けながら、以下のような研究活動に取り組む。まず、修士論文作成につながるように、各自の問題意識に基づき研究テーマを設定する。ついで、そのテーマに関する先行研究の収集・分析を行い、先行研究で十分に解明されていない課題について明らかにする。さらに、上記の基礎作業を行いながら、問題意識・研究テーマを一層明確にしつつ、関連する論文や資料の収集・分析に取り組む。こうした研究活動をベースとして、受講生にはオリジナリティーの高い修士論文の作成を目指してもらう。

キーワード

教育学研究、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 教育・学校問題に関する諸問題等を多角的かつ客観的に把握することができる。
2. 教育・学校問題に関する事実や実態等を究明することができる。
3. 調査・分析した内容等を口頭および文章で論理的に説明することができる。

授業計画

※下記の内容は受講生の人数や研究テーマによって変更する可能性がある。

第1回 前期ガイダンス

第2回 研究テーマの設定

第4.5回 文献資料の収集・分析法の指導

第6-10回 先行研究の分析結果の発表

第11-12回 研究方法の指導

第13-15回 研究視角・方法の検討

第16回 後期ガイダンス

第17-25回 研究成果の発表

第26-29回 修士論文の研究計画・論文構成の検討

第30回 総括

授業の予習・復習

各授業後に授業内容について、合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。参考文献等については、授業中に適宜紹介する。

評価方法

授業での発表やレポートの内容、研究活動の進捗状況・成果などにより評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業外での質問・相談等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。